

2018 TOEIC® セミナー報告書

学生の英語力向上を目指す仕組みづくり
～ TOEIC® Programの様々な活用方法 ～

●2018年8月3日(金) 丸ビルホール

学生の英語力向上を目指す仕組みづくり ～ TOEIC® Programの様々な活用方法 ～

2018年8月3日(金) 丸ビルホール

事例発表 ① 東北学院大学 1

東北学院大学における必修英語教育の改革

教養学部言語文化学科 教授、英語教育センター 副所長 渡部 友子 氏

事例発表 ② 愛知県立大学 8

愛知県立大学のグローバル人材育成

ー 外国語学部での取り組みから全学展開までの道のり ー

外国語学部 教授、グローバル実践教育推進室 副室長 宮谷 敦美 氏

事例発表 ③ 信州大学 16

信州大学理系学部が中心となり取り組んできた “グローバル人材”育成のためのプラクティス

繊維学部 教授 平林 公男 氏

事例発表 ④ 東京海洋大学 21

東京海洋大学グローバル化に向けた教育改革

ー TOEIC® L&R 600点4年次進級要件化 ー

グローバル教育研究推進機構 特任准教授 鈴木 瑛子 氏

Q&Aセッション 30

東北学院大学における 必修英語教育の改革



東北学院大学 教養学部言語文化学科 教授、英語教育センター 副所長 渡部 友子 氏

■ 改革前は学部ごとにバラバラだった英語教育

本日は、東北学院大学1、2年生の必修である英語教育の改革経緯と、現在の状況、そして今後についてお話しさせていただきます。

東北学院大学は仙台にある私立の総合大学です。伝統のある大学ですが、英語教育に関しては少し遅れ気味だったと思います。英語教育センターを設置し、TOEIC Bridge® Testを利用しながらどのように新しいカリキュラムを立ち上げたかということを中心に、改革前の状況、改革決定後の2年間の準備期間、そして2017年度新カリキュラム実施から2年経った現状、といった順でお話ししたいと思います。

まず改革前の状況についてご説明します。本学は文学部、教養学部、経済学部、経営学部、法学部、工学部の6学部があり、改革前の英語教育は、学部・学科単位で運営されていました。学生数は1学年当たり現在3,000人弱で、英語のクラスも相当数あります。教員配置は非常勤の先生も含めて、教養学部の教員が行っていましたが、大学教育の多くの部分が長くそうであったように、授業内容や評価などは、先生の裁量で行っておりました。しかし、内実は様々な問題が起こっていました。

文学部、教養学部についてはカリキュラム改正のタイミングが2年ずれているため、本日は経済学部、経営学部、法学部、工学部の4学部で始まったカリキュラムについて取り上げます。

■ 教えるに、学ぶに、学生の英語力の差

まず、問題点として、本学は規模の大きい私立大学で、入学者の学力差が大きいということが挙げられます。テストスコアのグラフは、きれいなベルカーブを描いており、学力の高い学生と低い学生の差はかなり大きい状態です。

もともと、全6学部のうち文学部と法学部は能力別でクラス分けをしない方針でした。そうすると一つのクラスに学力の高い学生から低い学生まで混ざってしまい、先生としてはどこに焦点を当てて教えて良いかわからないという悩みが生じます。そして、学生にとっては、能力のある学生は隣にいる学生の英語能力の低さにやる気をなくしてしまうということが起こります。つまり、教えるに、学ぶに、という状況になっていました。

さらに、残りの4学部では、テストスコア順にクラス分けを行っていました。しかしそれでは、自分の英語力レベルが正確に分かりません。例えば教養学部では、1学科でスコア順に三つのクラスに分けていましたが、自分がBクラスに分けられたとき、自分の学科の中では真ん中あたりの英語力だということしかわかりません。教える側としても、そのクラスの英語能力がどれくらいなのか、大まかにしかわからないという状況でした。また、クラス分けに使うテストはインハウスで自分たちが制作してしまっていたので、何の能力を測っているのか、ちゃんと測れているのかということも不安でした。つまりは、学生の学力差にうまく対応できていない状態であったというのが一つ目の問題でした。

■ 学生の能力を測定することから始まった 教養学部の取り組み

2点目の問題は、英語教育に関する運営責任者が不在だったということです。学科ごとに大まかな方針は出るのですが、学部ごとには大きなばらつきがありました。例えば、工学部では工学系の内容を扱う英語教育を行い、別の学科では読解を中心とした授業、また別の学科では会話を中心に進めるといった具合です。1年生、2年生での英語の授業が、学科によって大きく内容が異なっていたわけです。統括者が不在の状況で、クラス分けは学科任せ、教養学部の担当者は学部からの要請に合わせて必要な教員数を配置する状態でした。担当になった先生には、○○学部の○○クラスの担当ですと伝えますが、それがどんなクラスなのか、何をやれば良いのか、というのは分かりにくい状態だったと思います。例えば経済学部は大きい学部で、かなりの数のクラスがありますが、その中のGクラスと言われたとしても、どのくらいの能力の学生なのかは分からない状態だったのです。それぞれの先生ができる限りのことをしていたのですが、実はよく見えない状態でなんとなく英語教育を進めていた状況といえます。

この状況を見て、教養学部の言語文化学科に所属している私としては、まずは学生の英語能力をテストでしっかりと測ることをしたほうが良いのではないかと考えました。そこで、教養学部の学部長に外部のテストを使うことを提案し、予算取りを行いました。教養学部で外部のテストを1回やってみようということになったのです。

外部のテスト活用の第一歩としてはCASECを使用しました。教育測定研究所のテストで、コンピューターを使って実施するテストです。採用理由は、一つのテストで能力差が大きい集団に対応できるということがポイントになりました。本学の学生の英語力にどれほど個人差があるか分からなかったため、その幅も知りたかったのです。

まず、2014年の教養学部の新入生450人に、入

学確定後に順次自宅でウェブ受験をしてもらいました。多くの私立大学では、一般入試以外に様々な形の推薦入試があります。早い場合には12月頃、遅い場合だと3月の下旬頃に入学が決まるので、決まった学生から順次受けてもらうというやり方にしました。その結果、教養学部の新入生の英語力分布は、下は英検4～5級程度の判定から、上は英検2級～準1級程度の学生もいるという大きな幅で、予想通りの結果だったと言えます。

■ 全学教学改革委員会での動きに後押しされて

一方で、学部の多様な役職者たちで組織される全学レベルの教学改革委員会で「学士力」についての議論が2013、2014年に行われました。「学士力」とは、大学4年間の勉強でどのような能力を身に付けさせ、社会に送り出すか、という課題に対して文部科学省が使用する言葉です。これは英語にかかわらず、専門教育にも求められるものですが、英語に関しては入学時、ゼロからのスタートではないというところが難しい点です。例えば法学を学ぶ場合、大学からスタートし、4年間でどれくらいという目標を設定しやすいと思いますが、英語に関しては中高で学んできていますので、入学時点で大きなレベル差がある場合、卒業時に全員に同じ目標を持たせることは現実的ではありません。英語に関しては入学時の英語力を正しく測定した上で、その入学時のレベルに応じて2年後、あるいは4年後の現実的な目標を立てるべきという結論になりました。

その流れから、教養学部でCASEC導入準備を行っていた2013年9月に、共通必修英語教育改革検討小委員会という全学組織がつくられました。大学全体で英語教育を考えるというテーマは、本学としては画期的なことでした。

座長は学務担当副学長が務め、学務部長、6学部の学部長と英語教員で構成されました。英語教員は、

文学部英文学科から代表2人、教養学部言語文化学科から3人です。この中での最初の議論は、本学の入学者の英語力はどれくらいあるのかということでした。これについては、2014年の教養学部入学者に実施したCASECで点数が出るので、それをもっておおよその推測はできるだろうということになり、外部のテストを実施することの重要性が認められました。

共通必修英語教育改革検討 小委員会発足 2013年9月

- 座長：学務担当副学長
- 学務部長および6学部長
- 英語教員5名
 - ・文学部から2名、教養学部から3名

■ 英語教育センター設置に向けた準備を開始

全学で共通の必修英語教育にはどのような理念を持ち、どのような内容にするべきかも議論のポイントになりました。例えば、大学の講義の開講形態は、通常週1回が多いですが、語学に関しては週2回行うことや集中講義も選択肢としてあるか、といったことも議論に上りました。その上で、卒業時に保証すべき英語力について、大学全体の問題として検討を開始しました。

委員会の発足から半年経った2014年4月に、英語教育センター設置に向けて本格的に準備を始めることになりました。同じ時期に教養学部においてCASECのテストも実施されています。そして、センター長・副センター長以外は、教養学部にも所属している専任の英語教員を英語教育センターの構成員とすることが、英語教育センター準備委員会で決定しました。また、センター専属の英語教員の新規採用、2015年度入学者全員への英語テストの実施も決まりました。

準備委員会では具体的な必修英語教育についても議論しました。必修英語教育の理念は、「4技能を伸

ばず指導」です。大学の英語教育は長い間、読解中心、文法訳読が延々と続けられてきたという背景があります。しかし、高校までの英語教育は変革が進み、英語で授業を行うなど、聞く、読む、話す、書く、の4技能を総合的に扱うようになってきました。大学に入学した学生に対して、文法訳読をぶつけても、学生が戸惑うに違いないということで、4技能化を理念に据えることにしました。そして、最初の2年の共通教育では、専攻の違いにかかわらず基礎的な内容を共通教育として行うことを決めました。大学生にふさわしい知的レベルは確保するものの、専門教育に必要な英語教育は、3年生、4年生になった時に養成する、英語教員は専門性の部分には責任を負わない、という考え方です。

■ 英語力測定の必要性と外部テスト採用のポイント

共通必修英語教育の達成目標は、CEFR-Jを参照して作成しました。CEFR-Jとは、最近よく使われているヨーロッパで開発された言語教育のレベル分けであるCEFRを、日本の実態に合わせて修正したものです。A1が一番低く、A1、A2、B1、B2、C1、C2の6段階で構成されており、レベルごとに「言葉を使って何が出来るか」、という指標があります。これを本学に合うように少し修正して使用しました。週1回の授業を4セメスター行い、それで必修英語教育は完了とし、2年間で入学時のCEFR-Jレベルを1.5レベルくらい上げられたら良いのではないかと考えました。

共通必修英語教育の目標

- 達成目標の設定にCEFR-Jを参照
- 週1回の授業を4セメスター実施
- 入学時の英語力を1.5レベル上げる
 - ・平均的な学生 A2→B1～B2
- 2年修了時に到達度を測定する

本学の平均的な学生の英語力は入学時でA2です。つまり、英検3級程度の学生が多いのですが、2年間の共通必修英語教育を経てB1の少し上くらいに伸ばせればと考えたのです。もちろん入った時の学力が高ければ、もっと高い到達点を目指します。そして目指した英語力に到達できたかを確認するために、2年修了時に到達度を測定することにしました。

具体的な共通必修英語教育の方針は以下の通りです。

- クラス分けは入学時の英語力によるグレード制。具体的には5段階に分ける。
- 一番レベルが高い層と一番レベルが低い層に関しては、特別教育を実施する。
- 授業の成績に英語力を反映させるようなシステムを作る。
- 4技能を扱う。ただし4技能の授業での配分や教科書の選択は先生に任せる。

方針を決めた後は、入学時の英語力の測定にどのテストを使うのが問題になりました。教養学部で実績のあったCASECに関しては、コンピューターによる自宅受験は厳正さに欠け、新入生2,800人を入学初日にコンピューター室に連れて行きテストを実施するのは物理的に困難なため、導入できないと判断しました。様々検討した結果、TOEIC Bridge団体特別受験制度(IP: Institutional Program、以下IPテスト)を採用しました。

採用理由は、まず本学の入学者に適切な測定範囲であったということです。本学入学者の、下は英検4、5級から、上は英検2級、あるいはそれを少し上回るくらいという範囲に、TOEIC Bridge Testはちょうど対応しています。本学の学生にはTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R)は少々難し過ぎると思われました。TOEIC Bridge Testは、試験時間1時間というところも利点でした。1時間で「聞く」「読む」の2技能を測定できます。本来、4技能のテストを行うことがベストとは思いますが、入学時に実施する時間的余裕がありません。加え

て、本学の入学者は、TOEIC L&Rを受けたことがない学生がほとんどですが、TOEIC Bridge Testを受けることで、3年次以降、TOEIC L&Rへの挑戦につながり、就職活動等でのTOEIC L&Rスコアの活用にもなるだろうとも考えました。

■ はじめてのTOEIC Bridge® IPテスト

2015年4月に初めてTOEIC Bridge IPテストを全学で行いましたが、マークミスが大量に発生しました。学生番号、名前、生年月日、学科番号をマークミスする。本当に驚きで、お恥ずかしい話ですが、なんでそこで間違えるの?というケアレスミスが多かったのです。

これには本学に入学してくる学生の背景が関係しています。一般入試で入ってくる学生はマークシートに慣れておりますが、各種推薦で入ってくる学生は、テストをあまり受けた経験がなく、マークシートも初めてという学生もたくさんいたと思います。TOEIC Bridge IPテストはテスト結果のデータがすぐに出ますが、学生の個人名や学生番号にエラーが多く、正しいものと照合するのに、最初の年は本当に苦労しました。しかし、テストは無事に実施でき、このデータを経済学部、経営学部、教養学部、工学部の4学部提供し、クラス分けに使用してもらいました。ただし、この時点では、スコアを上から切るだけというやり方でした。

■ 英語教育センター発足、改革準備が本格化

2015年度、英語教育センターが発足しました。センター長、副センター長、各学部からの代表者1人ずつと、教養学部の英語教員全員が構成員です。2016年度からは特任講師3人と事務職員の配置も実現しました。

2016年度のTOEIC Bridge Test平均点は115.2点でした。1年目、2015年度の平均点は116.2点でしたので、平均点だけ見るとあまり変わらないように

見えたのですが、分布の形が異なりました。2015年度は割ときれいなベルカーブになっていた分布図が、2016年度にはいびつになっていました。これにより、平均点だけを見てその年の学生の英語力を判断しないほうが良いということが分かります。変化した理由は分かりませんが、2016年度は中央付近が少し下のほうにシフトしていました。

この2016年度のデータをもとに、2017年度から開始する新カリキュラムに合わせ、カリキュラムの設計に着手しました。a～eの五つの得点域に分けて、レベル別にクラスを分けていきました。4学部とも下の得点域に学生数が多いので、c、dのクラス数が多めで、上のクラスが少ないという分布です。eは最もスコアが低いグループで、88点以下で切り、相当数のクラスを配置し、準備を進めました。

	得点域	経済	経営	法	工
a	140以上	2	1	1	2
b	130-138	2	1	1	2
c	110-128	5	2	3	4
d	90-108	5	3	3	4
e	88以下	3	2	1	2

■ 周知活動とその結果

新しいカリキュラムになる4学部の新入生に対しては、2017年度から新しい英語教育が始まることの周知活動を行いました。入学手続きの郵送物の中に説明文を同封し、入学初日にTOEIC Bridge IPテストを実施し、能力別クラスを編成すること、グレードEになった場合は補習授業があることを告知しました。同時に、入学生に配布する小冊子も制作しました。事務職員がデザインした「えいごりら」というキャラクターを使って、親しみやすさが出るよう工夫しました。小冊子には、英語教育センターの概要、大学での英語の授業、プレイスメントテストやグレード別クラスの流れが分かる

ような図を入れ、Q & Aも加えました。本学のホームページにも掲載していますので、興味のある方はご覧ください。



このような周知活動の結果、春休みに思わぬ波及効果が発生しました。2、3月になって生協に英語に関する問い合わせが相次いだのです。学生から「参考書はどれが良いですか」と聞かれるということで、参考書は何を置いたら良いか、生協から英語教育センターにも問い合わせが入りました。そこでTOEIC Bridge Testの問題集を生協に置いた結果、それが飛びように売れたという話を聞いています。

このような経緯があったため、もしかしたら2017年の入学生のテストの点数は上がるのではないかと期待はしていたのですが、その予想は的中しました。2017年度の入学生は、前の年に比べて平均点が全体で6.8点上がりました。特に、新カリキュラムになった4学部のうち、文系の経済学部、経営学部、法学部でスコアが上がったのが特徴的でした。やはり事前に案内を受け、テストの重要性を理解し、きちんとやらなくてはいけないということが伝わったのではないかと、と思っています。全体の分布としては、再びきれいなベルカーブに戻りました。

■ クラス編成での悩みと解決法

嬉しい悩みも発生しました。1年前のデータを元にグレードごとのクラス数を決めていたのですが、上位の学生が想定よりも多くなったことで、上位のクラスが足りなくなり、下位のクラス数に余剰が出たのです。

本学は年度が始まってから自由にクラス数を変更できませんので、2017年度の上位クラスは1クラスが少し多めの人数で対応し、下位のクラスの人数は少人数で丁寧にケアするという方針にしました。

そして、所属グレードを成績に反映させるということも始めました。今まではクラスごとに成績を出していたので、下位のクラスで100点を取る学生と、上位のクラスで難しいことをやって頑張ったが60点だった学生の間、不公平さがありました。それを解消するため、上位クラスに入ったら良い成績が取りやすくなる成績評価に変更しました。これをしないと、わざとテストの手を抜いて下のクラスに入り、楽に100点を取ろうとする学生が出てくると思ったためです。

設定方法としては、最高点の上限を決めて、中央値を設定しました。中央値というのは平均とは異なる考えで、上位から得点を順番に並べ、真ん中に位置する値のことで、平均点を操作するのは難しいですが、中央値だと調整しやすいのでこちらにしました。また、2年次に進級する時にクラスの入替も行いました。1年生前期、後期の成績を元に、aとb、bとc、cとdの間で上位と下位の学生を数名入れ替えたのです。大勢が移動するわけではないのですが、クラスの入替えを行うことで学生の学習意欲を維持すると同時に、入学時の配属が高すぎた、低すぎた、という学生のクラス配属を適正化することが目的です。

所属グレードを成績評価に反映させる

	最高点	中央値
a	100	90
b	100	85
c	95	80
d	90	75
e	85	70

・上位グレードほど、よい成績が取りやすい
 ・わざと下位クラスに入ろうとするのを防ぐ意図

■ 学生の意識の変化とこれからの課題

2018年度から、はじめて英語力を成績に組み込むことを始めます。2年生の後期(1月)に、TOEIC Bridge IPテストを再受験してもらい、その得点を最終成績の20%に算入することにしましたが、この20%という比重が苦心のしどころでした。比重を大きくし過ぎると、テスト対策が中心の学習となってしまう、それは本意ではありません。逆に比重が小さすぎると、きちんとテストを受けてくれないということが起こる可能性もあるので、検討を重ねた末に20%にしました。20%だと、たとえ受験をしなくても授業の成績が良ければ不合格にはなりません。

このような取り組みをしたことで、学生の意識や態度が変化してきたと感じております。入学前に外部の英語テストを受けたことがないという学生が当初56%もいたのですが、入学時にテストを受けたことによって、自分の英語力を意識できるようになったと思われまます。英語検定試験に対する興味や意欲が湧いた学生が、「えいごりらうんじ」という英語教育センター相談室にやってきます。さらに勉強会を開催することにもつながっています。

2018年度の改善点としては、これまで以上に入学者への周知を強化するため、説明用ビデオを作成しました。ビデオは、クラス分けの仕組みを簡単に説明したあと、よくある質問に答える形になっています。ウェブ上で公開されているのでご覧ください。学生に配布した「履修ガイド」もこのページにあります。

URL : <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/facilities/center/english/guide.html>

2018年度、これから取り組む課題は三つあります。まず、2年修了次の到達度テスト実施です。1月にTOEIC Bridge IPテストを全2年生が再受験することがすでに決まっていますが、さらに特別予算を確保し、グレードaの一部の学生にTOEIC L&Rを試行することになりました。上位群にとって妥当なテストを見極める助けになればと思います。第二に、2019年度に向けての枠組み調整です。先行4学部では上位グ

レードのクラス数を増やす予定です。また新たに文学部と教養学部がこの枠組みに参加することが決まりましたので、履修細則などの全学共通化と、センター運営体制の強化が必要となります。最後に、担当教員への支援です。授業設計や成績算出などにおいて「やりにくさ」が少しあるようなので、説明会や研修会を通して継続的に改善に取り組みたいと思います。

本日お話しした経緯は、報告書の形で公開されていますので、興味がある方は本学ホームページから迎ってご覧ください。ありがとうございました。

もう少し詳しい資料は...

- ・渡部2016, 2017, 渡部他 2018
 - ・『東北学院大学教育研究所報告集』に掲載
 - ・本学HP ▶ 施設・研究・産学連携 ▶ 研究所・資料室 ▶ 教育研究所 ▶ 刊行物案内 ▶ 第16-17-18集
- ・『英語履修ガイド』や説明動画など
 - ・本学HP ▶ 施設・研究・産学連携 ▶ 研究・教育センター ▶ 英語教育センター

愛知県立大学のグローバル人材育成 — 外国語学部での取り組みから全学展開までの道のり —



愛知県立大学 外国語学部 教授、グローバル実践教育推進室 副室長 **宮谷 敦美** 氏

■ 愛知県の地域特性を反映する愛知県立大学

本日は、2012年に本学が文部科学省のグローバル人材育成事業に採択されてからの外国語学部での取り組みと、助成が終了した後、その取り組みを全学化した道のりについてお話しさせていただきます。

愛知県立大学には二つキャンパスがあり、メインとなる長久手キャンパスは2005年に開催された愛・地球博の愛・地球博記念公園のすぐそばにあります。学部は全部で5学部あり、長久手キャンパスに外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部、情報科学部の4学部があり、守山キャンパスに看護学部があります。

文部科学省助成のグローバル事業は、主に外国語学部が取り組みました。外国語学部は本学最大の学部であり、4学科、5専攻の言語があります。この最大の学部の外国語学部の定員が1学年340人、全学部を合わせると710人、全学で3,000人ほどの大学です。

愛知県はトヨタ自動車をはじめとするグローバル企

業やものづくり企業が非常に多いという地域的な特性があります。その影響もあり、外国人住民も多く、東京都に次いで全国で第2位となっています。行政サービスを例にとっても、外国人住民と日本人をつなぐ人が必要であり、潜在的にグローバル人材のニーズが高い地域といえます。

このような地域特性を持つ愛知県にある本学の大きな特徴は、二つあります。まず、一つ目は少人数教育。専任教員1人当たり学生数が約4.6人という恵まれた環境です。そして、もう一つは、地域特性と関係がありますが、10年以上前から、医療分野のポルトガル語・スペイン語講座を一般に向けて開講したり、外国人居住地区における外国人支援ボランティア活動を行うなど、地域連携・貢献に熱心に取り組んでいる点です。

■ グローバル人材育成事業における四つの取り組み

グローバル人材育成事業を動かしていたのは、大学のグローバル人材育成推進室という全学組織です。全学組織と言っても、実際の構成員は、ほぼ外国語学部の教員で占められていました。2012年から2016年の5年間に行った取り組みは四つあります。

まず一つ目に、グローバル人材にはどのような能力が必要なのか、語学力だけではなく何を育成すべきかを整理して、それをプログラムに落とし込みました。二つ目が、留学前から留学後までをどのような流れで

学びをつくれれば、より効率的でより効果のあるプログラムにできるかということを考え、体系的なプログラムである「グローバル人材プログラム」を立ち上げたことです。三つ目に、留学先の単位認定ができる制度を整えました。外国語学部では、60%近くの学生が何らかの形で留学をしていたのですが、学生が自主的に行っていた留学が多かったのです。せっかく留学するのであれば、単に語学学校に行くだけの留学ではなく、留学先で得た単位が大学で認定できる、実質的な学びがある留学をさせようと考えました。そして最後に、英語だけではなく、英語ともう一言語、複数の言語能力を高める取り組みに踏み出しました。この取り組みが一番特徴的かと思います。

これら四つの取り組みのうち、最初の二つは「グローバル人材プログラム」に関すること、後半の二つは、多言語学習センター iCoToBa (アイコトバ) での学習サポートに関することにつながっています。

■ グローバル人材に求められる八つの能力

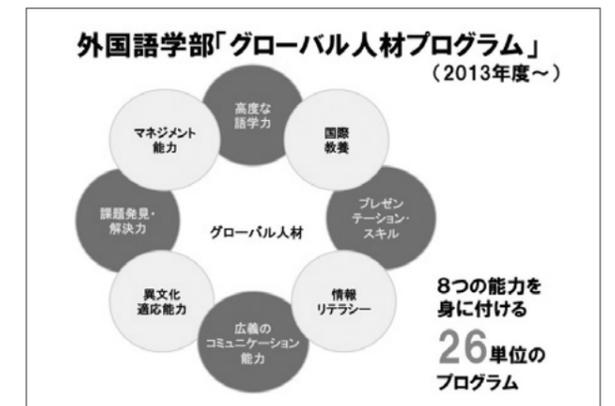
それではまず、「グローバル人材プログラム」についてご紹介します。

そもそもグローバル人材にはどのような能力が必要かということ、2012年の助成が始まる前後から、かなり議論しました。その頃に出ている様々な指標等を参考にしながら、八つの基準を挙げました。語学力の他に国際教養、プレゼンテーション・スキル、情報リテラシー、そして他者との折衝など、TPOに合わせて話せる広義のコミュニケーション能力、異文化適応能力、課題発見・解決力、そしてマネジメント能力の八つです。これらを必要な能力と設定した上で、どの科目が何の能力に対応するのか確認し、対応する科目がないものは新たに作る方針を定めました。それが、八つの能力を身に付けるための26単位のプログラムです。

足りない科目については、まずは先ほど申し上げた iCoToBa という多言語学習センターで、課外授業とし

て複数の科目を設置しました。「グローバル人材プログラム」の26単位にプラスして、これらの課外科目のうち、5科目の合格を必須としました。グローバル人材育成事業の助成が終了する2016年までには、これらを全学部の正式科目にすることをゴールに定め、無事達成することができました。

iCoToBaの中で新しく設けた科目は、外国語による Project Based Learning (以下、PBL) の科目です。まず、留学した時に自国の文化についてきちんと紹介できるようにするための「日本紹介」。そして、自国文化と他国文化を相対的に見る眼を養う「比較文化セミナー」を全ての専攻言語(英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語)で立ち上げました。さらに、学習言語で調査ができるようになることを目指し、「リサーチ発信プロジェクト」も新設しました。また、課題発見・解決力、マネジメント能力に関する育成科目が少なかったため、もともとあった「インターンシップ」に加え、iCoToBa 科目として「学生共同プロジェクト」を立ち上げました。



■ 留学前から留学後まで、一貫したプログラムづくり

次に、留学前から留学後までの一貫プログラムについてご説明します。まず、1、2年次の留学前の時期は外国語の基礎力を付ける必要があると考え、先ほどご説明したPBL科目での学習を奨励しました。また教

愛知県 & 愛知県立大学の強み

グローバル展開する企業多数
グローバル人材ニーズの高さ
潜在的グローバル人材の存在
外国人住民数 2位
地域社会で求められるグローバル人材

少人数教育
専任教員1人あたり学生数 約4.6人
地域連携・地域貢献
医療分野ポルスベ講座・外国人支援ボランティアなど

養科目を中心とした国際教養や情報リテラシーを身に付け、その後、留学します。留学期間は、学生によって1年や3カ月、あるいはサマープログラムと様々ですが、できるだけ単位取得留学を推奨しています。留学後には伸びた語学力を使って国際イベントなどの語学ボランティアやインターンシップ、または「学生共同プロジェクト」に参加し、実社会で生かすというつながりをつくり、一貫プログラムとしました。



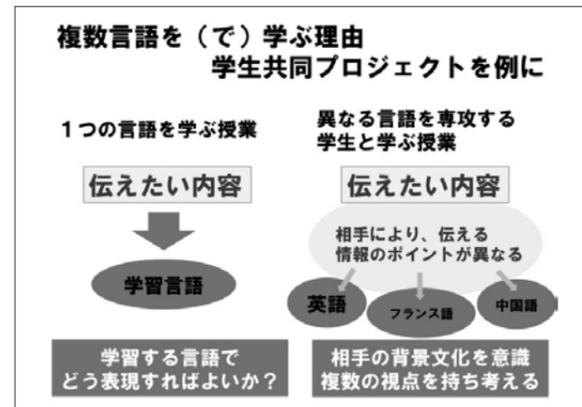
■ 複数言語能力の養成

最後に、本学の特徴でもある複数言語能力の養成についてです。これは評価委員の方にもチャレンジングだと言われた指標ですが、英米学科の学生の場合、英語はTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) のスコア800以上に、第2外国語も一定レベル以上を目指すというものです。この基準は、英語についてはビジネスの場面でも使えるレベルをイメージした指標です。第2外国語は、日常生活で困らないという目標を立てました。2016年度までは外国語学部の学生は第2外国語の検定を2回受けることができ、TOEIC L&Rに関しては1年から4年まで全員が毎年受験できる体制をつくりました。

複数言語を学ぶということは、それぞれの言語ごとに多様な背景、文化があることを学ぶということです。一つの言語だけを意識していると、その言語での表現方法を学ぶことはできますが、複数の視点を持って考

えることができません。複数の視点を持って考えることができるようになるために、複数言語の学習を奨励するプログラムに加え、異なる言語を学ぶ学生が共同で一つのプロジェクトに取り組む仕組みをつくりました。具体的には、学ぶ言語の異なる学生たちがチームとなって企業インタビューを行い、その企業のPR方法を考えるというプロジェクトがあります。例えば中国語を学ぶ学生と英語を学ぶ学生と一緒にプロジェクトに取り組むと、中国で大切にしていることなど、普段英語を学んでいる学生が耳にしない情報を知ることができます。異なる言語を学ぶ学生同士、お互いの学びを共有することができるのです。また、相手によって伝えるポイントが異なるということも実践で学びます。単純に英語にすれば良いというわけではなく、相手が何を理解しているのか、何を知りたいのか、ということを理解し、その上で情報をどのように出すのかを考える教育の仕組みをつくったところが、ユニークであると思います。

このように、語学の習得を実社会につないでいきました。語学力だけ身に付けば良いのではなく、語学をどう生かしていくのかということ、学生にイメージさせる仕組みです。



■ グローバルプラットフォームiCoToBa

iCoToBaは2013年の4月に開設された多言語学習センターで、本学のグローバルプラットフォームの役割を果たしています。2016年度まで文部科学省の助

成があり、6人の外国人専任教員がいましたが、2017年度からは外国人教員1人のみ専任で、あとは非常勤の教員で対応する体制になりました。人員の関係で科目数は減りましたが、基本的なコンセプトは変わらずに少ない予算でうまく回すよう、現在、試行錯誤しています。iCoToBaは、とても人気のある施設で、休み時間にはたくさんの留学生、学生が集まってきます。学生が新しい言語の勉強をするための自主学習サークルにも使うことのできる自由な空間です。



留学前準備講座は、2013年度からスタートし、2017年度は5言語で開講しました。英語以外のクラスは、アカデミックスキル、例えばノートテイキングやプレゼンテーション、講義リスニングなどを学ぶ授業が1週間に1コマずつあります。また、留学先での生活に必要な会話能力等を身に付ける授業もあります。基本的にはネイティブスピーカーの教員が担当しています。これらの講座に注力した結果、単位取得留学生数や海外協定大学数も大きく増えました。2012年は21校だった海外協定大学が、2016年には48校と2倍以上になりました。それ以上の変化は単位取得留学生数です。2012年は留学先での単位を取得した学生が37人でしたが、2016年は184人まで増えました。このように正課以外のところで先生が対応してくれる、相談に乗ってくれるというのが学生のモチベーションになっていると感じます。

コミュニケーション講座は、2016年までは5言語で開講していましたが、2017年度からは残念ながら

英語だけになってしまいました。A1からB2まで、様々なレベルを設定し、コミュニケーションが苦手な学生でも参加しやすい形にしました。また、映画やサブカルチャーをテーマにするなど、学生に対して敷居の低いところから始められるように担当教員が工夫しています。教員は学生に呼びかけをする動画をYouTubeにアップするなど、学生の呼び込みにも熱心です。

他にも、iCoToBaでは、語学学習支援として学生にグローバルイシューについて興味を持ってもらうため、異文化理解イベント、留学報告会、グローバルセミナーという3種類のイベントを行っています。

iCoToBaでやっていること

- ✓ 留学前準備講座
- ✓ コミュニケーション講座
- ✓ 語学検定対策講座
- ✓ iContact (あい・こんたくと)
- ✓ 地域コミュニティー言語講座 (2017年度～)
- ✓ 異文化理解イベント
- ✓ 留学報告会
- ✓ グローバルセミナー (2017年度～)

■ 実社会へ発信するPBL型科目

コミュニケーション講座の一環で、留学の準備以外にも、学んだ言葉を実社会に役立てるためのプロジェクトも多数作っています。語学検定講座も開講していますが、語学の検定スコアだけを上げようという考え方はありません。検定スコアは後からついてくるという考え方でスコアだけを追いかけない教育に力を入れています。

プロジェクトの例として、実社会と関わるPBL型授業の事例をご紹介します。愛知県には国際会議場があり、様々なグローバルイベントが開催されています。2014年度にはESD (Education for Sustainable Development) のユネスコ世界大会がありました。これに合わせて、おもてなし企画として、外国人のた



めの観光リーフレット制作のプロジェクトを作りました。愛知県とユネスコ世界会議の事務局に掛け合い、でき上がった観光リーフレットは、実際に会場や地下鉄の駅に置いてもらいました。そして会場では愛知県のPRをボランティアとして担当させていただきました。

インターネットを通じて世界の人々と交流をするプロジェクトもあります。カナダのトロント大学で日本語や日本文化を学んでいる学生と、Facebookを活用し日本語と英語で社会問題に関する意見交換をするというプロジェクトです。現代は、インターネットで様々なことを調べることができます。しかし、インターネット上で完結させるのではなく、実際にそこにいる人たちが何を考えているのかということにもっと興味を持つというプロジェクトです。例を挙げると、「日本では過労死があると聞くが本当なのか?」「カナダは移民国家で移民に優しいと言っているが、実際のところ、移民の増加を国民はどう感じているのか?」など、聞くことを



躊躇してしまうようなことについてお互い意見交換しています。

2016年度には、愛知県観光局とのコラボで、あいち観光ブックレットを作成し、県庁のウェブサイトに掲載されました。また、留学から帰ってきた学生がその経験を生かせるよう、地域企業と学生の共同プロジェクトとして、地域企業多言語広報プロジェクトも推進しています。海外進出やインバウンドビジネスに取り組んでいる企業の多言語広報や戦略に学生が参画し、アイデアを実際に採用していかうというプロジェクトで、3年半ほど続いています。これまでに27企業、8言語で行いました。具体例としては、西尾の抹茶、尾州の毛織物などがあります。抹茶生産地日本一である愛知県ということもあり、西尾の抹茶を紹介する英語の記事を学生が作りました。これは実際にマレーシアや東南アジアでの愛知県物産展等のお茶紹介で使用されています。



さらに、スペイン語で尾州の毛織物を紹介する企業のパンフレット記事も作成しました。愛知県の毛織物は伝統のある産業で、このパンフレットはフランスで開催されたファッションマテリアルの見本市、ブルミエールパリで使用されました。

このように、実社会で自分たちの手掛けたものを使ってもらえることが、学生のモチベーションになります。iCoToBaを立ち上げた時は、いかにクラスをつくるかということに注力していましたが、最近では学生たちの力を発揮できる場を見つけ、結びつけること

に力を入れています。学内だけのプログラムではなく、地域のグローバルイベントへのボランティア活動にも積極的に参加させています。昨年は世界青少年発明工夫展、今年はラグビーのワールドカップのプレ大会があり、名古屋国際会議場での国際会議ボランティアにも参加する予定です。



■ 様々な取り組みがTOEIC® L&Rのスコアに反映

もちろん、検定対策も行っています。2016年度までは語学学習アドバイザーによる個別指導、2017年度以降もTOEIC® Tests対策講座を毎週2回、また集中講座も開講しています。e-Learningも継続中です。他には、iContactというマンツーマンや少人数による会話指導もあります。英語に関する講座は全員外国人教員が携っていますが、他の言語について



は留学生の力も借りながら運営しています。1週間に30時間以上行っていますので、学生にとっては良い機会になっていると思います。学生のニーズに合わせて、個別指導やライティング、発音指導などにも対応しています。

様々な試みに手探りで取り組んでまいりましたが、その結果は点数として現れました。TOEIC L&Rの平均スコアが771点ですが、それを上回るスコア800点以上の学生数は英米学科卒業生100人のうち48人、外国語学部全体では、243人となりました。英米学科の4年次のTOEIC L&Rスコアも2012年から2016年度で約90点伸びています。800点以上の得点者比率も、32%から64%と大幅な伸びを示しました。

**2016年度
TOEIC L&R 800点以上
英米学科2016卒業生48人
(平均771.9点)
外国語学部で243人**

また、国際関係学科でも結果が表れました。国際関係学科は英語だけにこだわっておりませんので留学先はポルトガルや韓国など様々です。しかし、TOEIC L&Rスコアを学科全体で比較すると2012年から2016年で約50点の伸びが見られました。さらに、英語を専攻としない学科のスコア目標を730点と設定したところ、2012年度のヨーロッパ・中国学科の卒業生に関しては達成者数が全体の12%である19人でしたが、2016年度には45人が達成し、730点以上得点者の比率は27%まで伸びました。

■全学化に向けて

グローバル人材育成推進室は、主に外国語学部教員で構成された組織でしたが、2016年度から全学化に向けての推進準備室ができました。準備室には全学部から委員が参加しています。2012年からの外国語学部の取り組みは、全学部に広く周知はされていませんでしたので、2015年度の冬から、外国語学部の取り組みについての報告会を開き、2016年度に入って全学化を本格的に進めました。

全学化するにあたって、外国語学部ではないのに外国語をこれほど重要に扱う必要があるのか、という議論がありました。また、反対に外国語教育に熱心な教員からは、全学化で質の低下が起きるのではという懸念もありました。そこでまず取り組んだことは、学内予算の確保と、外部助成金へのアプローチです。昨年と本年、外部財団からの助成金をいただいています。

外国語学部以外の専門分野におけるグローバル人材とは何か、ということも議論になりました。例えば、看護学部では、地域に外国人が多くいる状況でグローバル化は避けて通れないというところから議論を進めました。語学に関しては、外国語学部以外の学部では、まずは一言語の習得を目指すこととしました。基本的なグローバルの人材としての枠は変わらないので、八つの能力を身に付ける枠組みを残し、各学部が提供できる科目と全学化でプラスアルファの魅力をつくるために、他学部の開放型のPBL科目を増やすことに

全学化にともなう変化 & 質の担保

- ✓ 文部科学省助成終了後の予算確保
→2017年度より学内予算+外部助成金
- ✓ 外国語学部以外の専門分野における「グローバル人材」としての能力養成
→語学要件:外国語学部2言語、他学部1言語
- ✓ 全学化によるプログラムの魅力向上
→8つの能力の枠組みと他学部開放型PBL
- ✓ 全学の英語能力養成
→教養教育で、1~2年生のTOEIC L&R受験を必修に

しました。

また、英語の質を担保するために、「グローバル実践教育プログラム」では、外国語学部以外の目標をTOEIC L&Rスコア550点にしました。英語だけではなく、スペイン語やポルトガル語、中国語は、地域住民の数でも多いので、これらの言語を学ぶことが大切という考えのもと行いました。この語学検定費用が学生にとって負担になることも心配でしたので、教養課程の科目では、一定以上の語学検定の成績で単位を認めることとしました。

英語	TOEIC L&R 550	または、 各教養 外国語 科目1、 IIでA評 価を4単 位以上 (英語を 除く)
フランス語	実用フランス語技能検定4級	
スペイン語	DELE A1	
ドイツ語	ドイツ語技能検定試験 4級	
中国語	中国語検定試験 4級	
ポルトガル語	ポルトガル語検定試験CIPLÉ	
ロシア語	ロシア語能力検定試験 4級	
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定5級	

全学対応にあたり、iCoToBaの開講にも工夫を凝らしています。まず、外国語のコミュニケーション講座のレベルを拡大しました。医療分野のポルトガル語やスペイン語、観光分野の中国語などで、地域コミュニティ言語講座を始めました。これらの講座を受講することで、専門分野の勉強を始めたときに自分の専攻とつながるということを意識させるためです。また、学生の語学学習へのハードルを低くするために、1学期13週の1タームではなく、90分×5コマを1セットというショートコースを作りました。

教養課程の英語にも様々な工夫をしました。e-Learningの活用、個別の相談室の開設、語学検定による単位代替などです。相談室は数人の外国人専任教員で対応しています。教養英語の外国人の専任教員の担当率は55.7%、非常勤教員を含めると63.3%なので、1週間に1回は外国人の先生と勉強することになります。英語で学ぶ科目を増やしたことも取

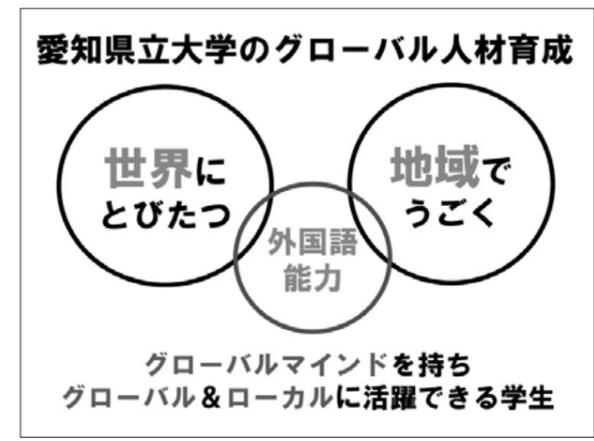
り組みの一つです。

また、昨年からTOEIC L&Rを全学の1、2年生に実施しています。今年はまだ実施していないので1年分の結果しかありませんが、1年生の入学時点で外国語学部全学科の平均スコアが605点、日本文化学部では487点。これが、本学の現状です。今後どのように伸びてくるのか、TOEIC L&Rを使うことが刺激となり、どのような効果が出てくるのか、今後見えてくると思っています。外国語学部に関しては、昨年と今年で比較することができます。同じ学生の平均点で見ると、1年で50点くらいは伸びているという状況です。

■愛知県立大学が考えるグローバル人材育成

ポイントとしては、まずグローバル人材育成事業助成期間中に全学化を見据え、その取り組みを徐々に全学に紹介し、協力が得られる形をつくったということです。そしてもう一つは、語学力を生かした地域でのプロジェクトなど、非正課であった科目の正課化が比較的スムーズに進んだことが成功した理由とと思っています。今後、全学のプログラムについては、専門性と地域特性と外国語の関係について、これからも議論を深め、より良いプログラムを作っていきたいと思えます。そして、これらの取り組みの効果測定にTOEIC L&Rを使っていく考えです。

愛知県立大学は世界と地域のグローバル化におい



て、外国語能力向上だけを目標にするのではなく、外国語を使って何ができるのか、ということもこれからも大切にしていきたいと考えています。

信州大学理系学部が中心となり 取り組んできた“グローバル人材” 育成のためのプラクティス

信州大学 繊維学部 教授 平林 公男 氏



■ 理系学部での英語教育について

信州大学の平林と申します。専門は「衛生動物学」、「陸水生態学」です。理系と英語は直結しないように思われるかもしれませんが、理系の学生にもコミュニケーション手段として使える英語の教育がとても重要になってきます。

当大学には博士課程、修士課程の大学院生も数多く在籍します。大学院へ進学しても、また、企業に就職してからも、英語を話せない、使えないという状況では困るという思いから、グローバル教育に力を入れることになりました。本日は、なぜ理系学部の専門外の私が英語教育に携わるようになったのかも含め、信州大学理系学部のグローバル化の背景やTOEIC® Tests 導入についてご説明いたします。

■ 様々な出身地から集まる学生たち

信州大学には約9,100人の学部学生に、約2,000人の大学院生が通っています。附属施設には幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校があり、病院もあります。教職員数は約2,500人です。

キャンパスは長野県内に4カ所あります。メインの松本キャンパスに加え、繊維学部は上田キャンパス、工学・教育学部は長野キャンパス、農学部は伊那キャンパスという構成です。入学者のうち、地元出身の学生たちは約25%で、多くの学生は全国から集まってき

ています。この多様な文化や風習を持つ様々な地域から学生が集まるということも、本学の特徴の一つになっているようです。

本学には繊維学部、農学部、工学部、理学部など合わせて8学部あり、それぞれの学部大学院のコースがあります。また、2018年には、理系学部の博士課程である総合医理工学研究科も新たに発足しました。

大学、大学院をあわせ300人の留学生も在籍しています。大学間の交流協定を結んでいる海外の大学はおおよそ100校に上ります。理系学部の中で比較的早くから学部間交流協定を積極的に行ってきた繊維学部では、約90校との学部間交流協定を締結しています。協定先は中国、韓国などの東アジアが最多で、アメリカ、ヨーロッパなどにも広がっています。国をま



たぎ、「ファイバー工学国際ネットワーク」を広げ、教育や教員同士の研究がつながる組織をつくっています。

■ 国内唯一の繊維学部として

繊維学部は、2010年に創立100周年を迎えた古い学部です。繊維学部の前身となった上田蚕糸専門学校の当時の講堂は国の登録有形文化財に登録されており、現在も卒業式などで使われています。

「繊維学部では何を勉強するのか」とよく尋ねられますが、繊維イコール衣服というわけではありません。筋肉繊維、炭素繊維、光ファイバーなども全て繊維に含まれます。小さなものはDNAから、大きなものはジオテキスタイルまで、バラエティに富んだ内容を扱う、いわゆる総合理工学系学部です。

学部内は大きく四つの学問分野に分けられます。衣類の着心地や使用繊維をサイエンティフィックに扱う先進繊維・感性工学科。以前扱っていた織機や紡糸機などの知見を元に発展させた機械・ロボット学科。染色、繊維素材などにまつわる分野を学ぶ化学・材料学科、そして桑や蚕から発展した応用生物学科です。私の所属は、この応用生物学科になります。

繊維学部では1998年度より、「先端繊維技術科学研究拠点形成」が文部科学研究費補助金(COE形成基礎研究費)に採択されました。それに引き続き、2002年度からは「先進ファイバー工学研究教育拠点」が21世紀COEプログラムに採択されるなど、国内唯一の繊維学部として、優れた若手研究者の育成や新たな学問分野の開拓などを図ってきました。さらに2007年度からは「国際ファイバー工学教育研究拠点」がグローバルCOEプログラムに採択され、より国際的な研究基盤の確立と世界をリードする人材の育成を目指しています。

国際社会を牽引するには、グローバル力、それに直結する英語力も身に付けなければなりません。上述したような各COEプログラムへの申請にも、目標とするTOEIC Testsの点数、英語力の開示が必要です。そ

してなにより、学生たちが卒業した後に活躍するであろう理工系の企業が英語力を求めています。急速に加速するグローバル化社会の中で生き残るためには、諸外国との共通言語での取引や技術情報収集が不可欠だからです。

信州大学がグローバル化に力を入れるようになった背景には、このような理由がありました。

■ 英語で苦労した学生時代を経て

ここで、英語の教員ではない私が繊維学部でグローバル化に携わることになった背景をお話します。

私は理学部の生物学科を卒業し、大学院では医学部に進みました。そこでマラリア媒介蚊の研究を行うために、患者の多いソロモン諸島国に3カ月調査へ行くことになりました。これが私の最初の海外生活経験でしたが、当時は英語を話すことが全くできず、大変苦労しました。

その後異動した山梨県立女子短大で、2度目の海外生活の機会がありました。10カ月間ロンドン大学に留学できることになったのです。その時は毎日研究をしながら、夜に自費でランゲージセンターに通うなど、英語力を伸ばすために尽力しました。3度目の海外生活は、信州大学に来てからです。オーストラリアのメルボルン大学に3カ月間通うチャンスももらいました。この時は朝から晩まで英語漬けになるため、学生が入るコンドミニアムに入れてもらい、家族は連れて行かずに、日本語を極力使わないで生活をするように心がけました。

その頃から全国の大学でグローバル化が進められるようになり、信州大学でも英語教育を見直す動きが始まりました。繊維学部で教授になった翌年より、留学経験が何度かあった私が学部長補佐として英語教育を担当することになりました。英語教育をする立場としてはほとんど素人ですが、生きた英語を学んできた身として学生に伝えられることがあればと思い、現在は国際交流推進室長として英語教育に向かっています。

■ “学士レベルの資質を備える人材を育成する”ために

全国の大学がグローバル化に注力し始めた背景に、2012年の8月に中央教育審議会が発表した文書があります。「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の中に、“学士レベルの資質能力を備える人材育成は重要な課題”との文言があったのです。

少子化に伴い、入学者のレベルが多様化する中で、大学における学位付与の水準が曖昧になりつつありました。学位の国際的通用性が失われることを避けるためには、どのような大学教育を行えば良いのか、それぞれの大学で自主的な教育改革が必要となりました。信州大学では、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーをどのように設定するのか、学生の質を保証するためにどうすべきなのか議論を重ねました。

自学自習の位置づけも、これまで以上に重要になりました。理由の一つに、文部科学省の規定があります。文部科学省が設定した大学における1単位とは、授業1時間に対して自学自習を2時間行うというものです。そこで前述したCOEプログラムなどにアプライするためにも、自学自習の位置づけがカリキュラム上、より必要となりました。また、学生たちの主な就職先である企業の採用方針の変化も理由の一つです。企業は、学生たちが何を学んできたかではなく、何ができるのかということに重きをおいた採用をするようになり、学生たちの自らの学びの力がより重要となってきたのです。

ただ通常の授業を行うだけでなく、授業前にどう予習させるか。また、授業を受けたあと、学生たちは何ができるようになるのか。グローバル人材を育成するにあたり、学生たちが自ら学ぶ環境をどのようにつくるかが大事なポイントになりました。

本日は、改革を進めてきたグローバル化のカリキュラムの中でも、特に理系学部の英語に関する例をお話しさせていただきます。

■ 繊維学部において必要な英語力とは

繊維学部の学生に身に付けさせたい英語力というのはどういう力なのか。学生の多くが修士、博士課程に進む理系学部でのグローバル化の導入ということで、博士課程を終える9年目の学生に、修了時に身に付けてほしい英語力をトップダウンで考え、必要な英語教育を検討しました。理学部、農学部、工学部、繊維学部の4理系学部の学部長が「信州大学理系学部英語教育改善ワーキング」という組織を立ち上げ、各学部の学部長補佐や副学部長と一緒に、テストの点数を上げる英語ではなく、研究内容を相手に伝えてコミュニケーションを取ることができる英語は、どのように学ぶべきかを考えたのです。

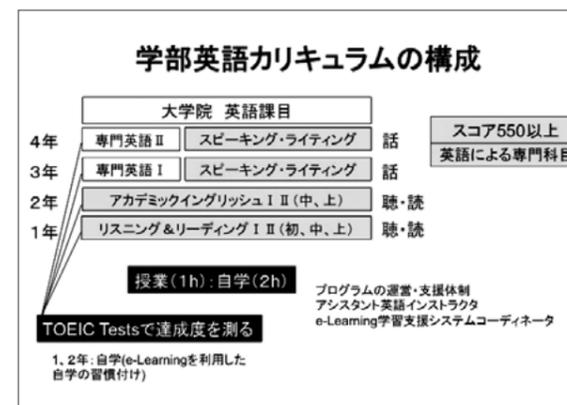
現在、グローバルな商取引や情報収集はいつでもインターネットで行われるようになっています。それに伴い、理系の学生に必要な英語力のプライオリティも変わってきたと考えました。インターネットを駆使できる技術者ということは、英語の4技能を読む・聞く・書く・話す、という順に身に付けられなければ、グローバルな人材ではないのではないかと本学部では考えたのです。そしてその考えを基盤に、ツールとして使える英語を身に付けさせる「英語教育プログラム」を検討しました。

繊維学部学生に身に付けさせたい英語力

- * 繊維学部の卒業生のほとんどが理工系の企業に就職し、生産、開発、研究の第一線で仕事をしています。
- * 急速に加速するグローバル化の中で企業が生き残るためには、諸外国との取引拡大、諸外国の技術情報収集が不可欠であり、学生に必要な英語力をつけ社会へ送り出すことは、本学部の重要な責務であると考えられている。
- * 現在、グローバルな商取引、情報収集のほとんどがインターネットに依存しており、「インターネットを駆使できる技術者」という視点から英語の4スキル読、書、聴、話の必要優先度を考えなければならない状況にある。

■ e-LearningとTOEIC® Testsで学生一人ひとりの学習進捗を把握

グローバル化を目指したこのプログラムでは、1、2年生時は、とにかく読む力、聞く力を重点的に身に付けることを目標としました。そしてある程度、読み・聞きができるようになった学生から、次は話す・書くという発信型の能力を中心に学んでもらうようにしました。



英語力は自分ではなかなか測ることができませんので、英語学習の達成度を測るためにTOEIC® Listening & Reading Test(以下、TOEIC® L&R)を使うことにしました。TOEIC L&Rは、全国の受験者の平均点を発表しており、全国の大学生の平均点は449点、理工学系の学生の平均は427点だということもタイムリーに分かります。また、学生の平均だけでなく、企業が求める新入社員の方の平均スコアや部門ごとの平均スコアも分かるため、学生たちは、このスコアを目安として自分が目標にすべきスコアが簡単に分かります。

TOEIC L&Rを導入した当初は、繊維学部の1、2年生のみ受験と設定していましたが、2015年には基本的に、医学部を除く全理系学部の1年生に受験してもらうことになりました。自主的に受験する学生も増え、徐々に大学全体の受験者数も増えています。現在、繊維学部では1、2年次に各2回の受験を義務とし、英語学習のベンチマークにしています。TOEIC L&Rは50点上がれば統計的に英語力が伸びたと言えるこの

とですので、繊維学部では1年間で50点伸ばすことを目標にしています。入学時のTOEIC L&R平均スコアが450点である繊維学部の学生たちも、卒業時には600点程度取れる計算で設計されています。目標は650点に到達できる学生が増えることですが、留学を志している学生たちには、更に上の700点以上を目安にすれば海外の大学・大学院への進学も考えられると伝え、学習の励みにしてもらっています。

「学生にもとめる英語の能力」(目標値)

- 卒業時TOEIC L&R600点以上を求めたい。
目標は650点達成(就職の際、大変有利)
700点を超えると、海外の大学、大学院への留学の道が開ける。
- 計画(半年で25点レベルup)
入学時(450点: 大学生の全国平均: 理系)
1年生 前期475点 後期500点
2年生 前期525点 後期550点
3年生 前期575点 後期600点
卒業時 600~650点
- 学習支援体制が整備され次第、「卒業要件として500点を設定したい」という予定。

■ 学習進捗を測るためにTOEIC® L&Rを活用

TOEIC L&Rは目標指数として取り入れているだけでなく、各学生の学習進捗を知るためにも活用しています。入学時に受験したTOEIC L&Rのスコアで自分の現在の英語力を知り、日々の自学自習ではe-Learningで予習・復習を行います。そして次回の英語の授業で、e-Learningを振り返る小テストを行い、TOEIC L&Rの受験へとつなげています。このようにして、講義ごとに受ける小テストとTOEIC L&Rスコアで各学生の点数をモニタリングしています。

このモニタリングは、生徒にだけ有効というわけではありません。入学時のTOEIC L&Rの点数に加え、毎週の小テストの点数が集計されることで、クラスの平均的な英語力の伸びが分かります。このスコアを私が確認し、平均点が下がるクラスがあると担任の先生にヒアリングすることもあります。

他にもTOEIC L&Rを活用したクラス編成も行っています。例えば、12月のTOEIC L&R 団体特別受験制度 (IP : Institutional Program、以下IPテスト) を受けなければ2年次能力別のクラス分けは最下位のクラスに振り分けられるようにしました。

また、TOEIC L&R IPテストのスコアは成績評価にも反映させています。一例として、講師が行う期末等の試験の割合が50%、小テスト30%、そしてTOEIC L&R IPテストの結果を20%として成績を計算します。TOEIC L&R IPテストのスコアが占める割合は高めの設定だと思えます。とはいえ、TOEIC L&Rのスコアが2年間で如実に伸びていると言われると、決してそうではありません。入った時と点数がほぼ同じという学生もまだ多いため、学生のモチベーションを上げるために、学部長表彰というものも近年創設しました。2年間で一番スコアが伸びた700点以上の学生、一番スコアが高かった学生などに授与し、各々の頑張りが学年全体に見えるようにしています。

大学1、2年次は学生たちに英語学習に取り組んでもらえるよう、TOEIC L&Rを強制的に行っていますが、3年次以降も継続して学習してもらうため、大学院の入学試験にもTOEIC L&Rのスコアを使っている学科も多くなってきました。各学科で換算の仕方、スコアの使い方は異なりますが、公平で間違いのない結果が出るということから、大学院入試でのTOEIC L&Rスコアの利用は有効です。

大学院の入試にTOEIC L&Rスコアを利用

- 学生のモチベーション維持のために。
- 大学院英語試験問題作成労力の軽減のために。

↓

◎TOEIC L&Rのスコアとは平成29年7月以前のTOEIC L&Rと、平成29年8月以降TOEIC L&Rのスコアを含みます。ただし、TOEIC L&R IPテスト、カレッジTOEICは除きます。
 ◎分野によってはTOEIC L&Rのスコアを英語の試験の得点に換算することを選択できます。換算できるTOEIC L&Rのスコアは、平成29年4月1日以降に実施されたテストに限ります。換算する場合、当該 TOEIC L&Rのスコアが750点以上の場合は、得点を100点とみなします。但し、TOEIC L&Rのスコアが250点未満の場合は、得点を0点とみなします。

■ TOEIC® L&Rを導入するにあたって重ねた議論

TOEIC L&Rを導入し、カリキュラムに組み込むことについては先生方とも議論を重ねました。例えばTOEIC L&R受験の際には、先生方には試験監督として責任を持ってもらわなければなりません。また、他大学の動向も分かりませんので、本当にTOEIC L&Rの活用が必要なのか、不満、疑問を持つ教員も少なくありませんでした。

そこで、一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (以下、IIBC) の方にご相談し、TOEIC® Programとはどういうものなのか、今どのような形で他大学や企業で活用され、注目されているかを説明してもらったり、集積されたデータを使って社会的ニーズを話してもらうなどして、先生方の理解を深めていきました。

最新の動向としては、信州大学はTOEIC Testsの受験者数が非常に多いため、IIBCの賛助会員になって学生1人当たりの受験料負担を減らすことを検討し、教育担当理事とも相談して、昨年4月に信州大学は賛助会員となりました。また、今後はTOEIC L&Rのスコアを卒業要件にすることを検討していく予定です。

世界に活躍する人材を育てるため、生きた英語力を身に付けさせるべく、今後もグローバル化を推し進めていきたいと考えています。

平林氏の発表では「学修」が使用されていましたが、表記統一のため「学習」に変更しています。

東京海洋大学グローバル化に向けた教育改革

— TOEIC® L&R 600点4年時進級要件化 —

東京海洋大学 グローバル教育研究推進機構 特任准教授 鈴木 瑛子 氏



■ 国内唯一の海洋系総合大学

本学海洋科学部では、5年前に3年生から4年生への進級要件としてTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) のスコア600点が設定されました。私自身は、3年目からこのプロジェクトに関わるようになり、現職のTOEIC® Programに関わる教育プログラムを統括する教員として2年目になります。発足当初の詳細に関しては伝え聞いた部分も多くなりますが、できる限り皆様のお役に立てるような情報をお伝えしてまいりたいと思います。

まず大学全体のこと、そしてこの進級要件ができた背景についてお話しします。

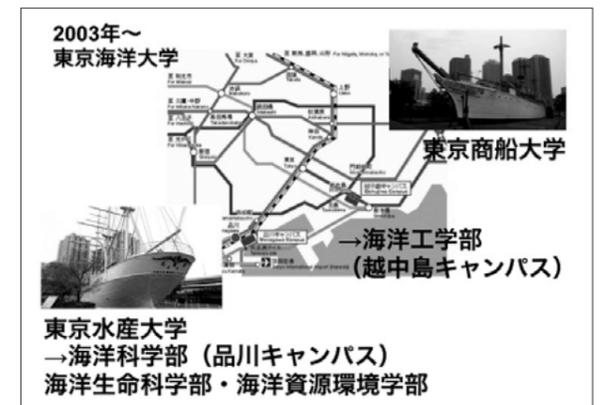
■ 世界に開かれたキャンパスを目指した英語教育

東京海洋大学は、東京商船大学と東京水産大学という海を専門とする二つの大学が統合し、2003年に設置された大学です。キャンパスにより学部が異なり、越中島キャンパスが海洋工学部。実際に船のオペレーションをスムーズに行うことなどを目標に、海事英語を中心に英語教育カリキュラムが組まれています。そして、もう一つが品川キャンパスにある、海洋科学部 (2017年度以降、海洋生命科学部、海洋資源環境学部) です。

東京海洋大学が誕生して約10年が経ち、品川キャンパスの1学年300人の英語力の底上げが課題となり

ました。本学の学生は約半数が大学院に進学しますが、そこでは、普段は日本語を話す先生方でも、研究発表の際には英語を使って情報を発信することが求められます。ところが、そこに入る学生たちの英語力が研究者に求められる国際競争力のある英語力に達していないという問題がありました。資料を読むにしても、学会発表を行うにしても、その素地ができていない状況でした。その要因の一つに、大学での入試の際に英語力が問われていないということが考えられました。

そこで、大学入試時の英語力を測るため、入学式の前後で全員にTOEIC L&R団体特別受験制度 (IP : Institutional Program、以下IPテスト) を受験してもらうことにしました。「TOEIC® Program DATA & ANALYSIS 2018」のデータでは、全国の大学1年生の平均が433点、理・工・農学系専攻の大学1年生の平均は425点と出ていましたが、当時の品川キャンパスの学生たちの結果はほぼ全国平均と同じ程度、もしくは平均点よりやや下という状態でした。



このような状況に変革を起こすべく、キャンパスの国際化に向けた取り組みが必要と考えられました。世界に開かれたキャンパスを目指すため、大学院の授業の英語化をゴールとした新たなキャンパス構想を打ち出したのです。そのゴールを目指し、具体的に役立つ海外経験として、海外に短期間滞在しインターンシップや研究に従事する演習型の授業など、継続的に英語で学ぶ環境を用意しました。更に、その基礎工事として、3年生から4年生への進級時にTOEIC L&Rのスコア600点を必須とするTOEIC進級要件を設定したのです。東京海洋大学のこの一連の取り組みは、文科省のグローバル人材育成推進事業に採択されました。



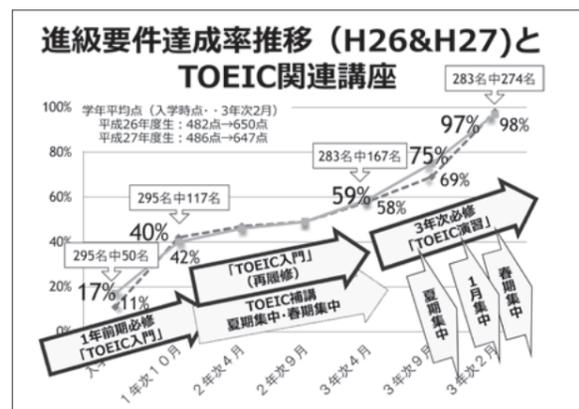
進級要件として、数値で示す明確な着地点をTOEIC L&Rスコアで設定した理由に、その試験の性質があります。TOEIC L&Rはビジネスシーンや日常会話からの出題が多く、実生活に即していること、また、就職活動のエントリーシートでの評価がされやすく、企業の期待とマッチングしやすいところに着目しました。スコアについてはビジネス上最低限のコミュニケーションを取れると期待できるレベルがTOEIC L&Rスコア600点ということで、進級要件を600点に設定しました。

■ 進級要件としてのTOEIC® L&Rスコア

進級要件化の取り組みが始まり、これまで1、2期生が進級要件の締め切りを迎えました。現在の3年生

が3期生です。

本日、TOEIC L&Rのスコアを進級要件として進級した二つの学年につき、各時点での進級要件達成率と、その間に大学で行った取り組みを追ったグラフをご用意しました。折れ線は各学年の全体の人数に対して何人の学生が600点以上を取得しているかという数字、矢印は本学の取り組み内容を記しています。



まず、1期生を示す点線のラインをご説明します。入学時に対象学部全員が一斉に受けるTOEIC L&R IPテストで、31人の学生が600点以上を取得しました。これは学年全体の11%にあたります。

1年生の前期終了時には、42%の学生が進級要件を達成しました。その後、再履修授業、任意参加の補講授業などを経て、3年次4月の時点では約60%の学生が進級要件を突破しています。ここで再びTOEIC L&R関連講座が必修となり、集中講座を経て、最終的には入学後、ほとんどの学生が600点以上のスコアを取得するという結果を出すことができました。したがって、平均点も大幅に上昇しています。

実線が2期生のグラフです。1期生の学生たちと似た推移をたどっていますが、3年生の4月から大きく伸び、9月で75%です。同時期の1期生の69%に比べ高い数字が出ているのは、1期生たちの代で、600点に達しなかった学生に対して厳格な措置が取られたことが影響していたと考えられます。

このように、2年続けてほとんどの学生がやや高めに設定されたハードルを越えていくことができました。

それでは次に、大学としての取り組みをご紹介します。

■ 進級要件達成のための取り組み

学習環境の整備についてですが、語学学習のためのグローバルコモンというスペースを設けております。こちらではTOEIC L&R対策に限らず、様々な英語学習に関する書籍、英字新聞、映画、海外ドラマのDVD、学習ソフトを備えています。また、学外の英語学習アドバイザーという有資格者による、英語力習得の悩みを継続的なカウンセリングで個別に相談できる環境も整えています。

他にも、TOEIC進級要件を管理運営する人員として、専任教員が学習をサポートしています。併せて、TOEIC L&Rスコアアップに直結するようなイベントを開催したり、学外での学習機会を確保するためにe-Learning、アプリ学習も活用しています。こちらは、一部学習状況を成績評価に取り入れています。このように、学科や学部、学年を超えて支援を行うべく、様々な関連母体と連携を取っています。

また、大学生協では、受験機会の確保のため、現在学内TOEIC L&R IPテストを年8回実施しています。情報周知の徹底も必要となりますので、掲示板での発信やニュースレター、一斉メールの配信を行っています。必修授業に関わりますので、見てない、聞いてないということを避けるため、また訴求効果の観点から、学年別、レベル別に異なるメッセージングで情報を伝える取り組みを行っています。

■ 新たなカリキュラムの整備

続いて、授業科目に関する仕組みのご紹介です。履修カリキュラムとしましては、これまでのアカデミックな英語、コミュニケーションな英語に関する科目も残しつつ、新たにTOEIC L&Rのスコアを英語力養成の指標とした「TOEIC入門」と「TOEIC演習」を必修科

目として設置しました。ほとんどの学生はこの2科目を通して進級要件を達成していきますが、他にも、任意参加の授業が設置されています。

一つ目の「TOEIC入門」は、まずは進級要件達成のためのストラテジー習得、そして英語学習を継続する習慣を身に付けることを目標としています。

「TOEIC演習」は、4年次への進級に必要な科目となり、TOEIC L&R 600点以上のスコア取得を単位付与要件と定めています。また、実際にはTOEIC L&Rスコア600点以上だけではなく、TOEFL、IELTSのスコアについても単位付与要件の資格試験として認めています。

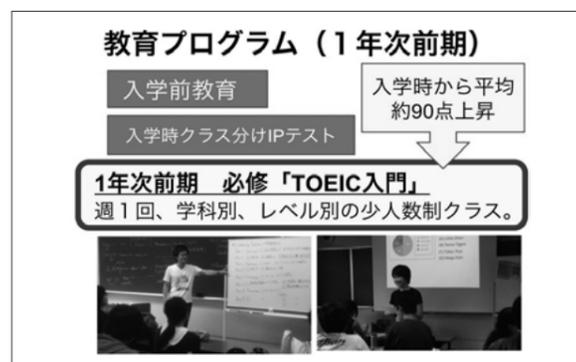
『TOEIC進級要件』カリキュラム整備 卒業に必要な単位124単位

- 総合科目 (フレッシュマンセミナーなど共通導入科目、文化学系、哲学・科学論系、社会科学系、健康・スポーツ系、外国語系)
- 基礎科目 (基礎科目、グローバルキャリア関連科目、必修「TOEIC入門」「TOEIC演習」【2単位】)

- 専門科目 (実習・演習・卒論など)

■ 英語力のレベルに分かれたクラスで基礎学力を付ける

授業の実際の運営は、推薦、AO入学の学生に対して教材を指定する入学前教育から始まります。入学時に全員にTOEIC L&R IPテストを受けてもらい、そのスコアで英語の授業と「TOEIC入門」のクラス分けを行います。このクラスは学科、レベル別に分かれた20人程度の少人数制を取っており、1年次前期の週1回の授業を通して一人平均90点を上昇させる目標を持っています。成績評価基準の評価対象にはTOEIC L&Rスコアの伸びを入れていきます。クラススタート時からのスコアが実際に何点上がったかが評価されるのです。また、自主学習の取り組みも評価対象としています。



単位を取得できなかった学生は1年生後期から3年生になるまでの1年半で「TOEIC入門」を再履修できます。単位を取得した学生も任意で参加できる補講授業、そして3年生に向けたクラスを低年次でも履修できる制度を設けています。

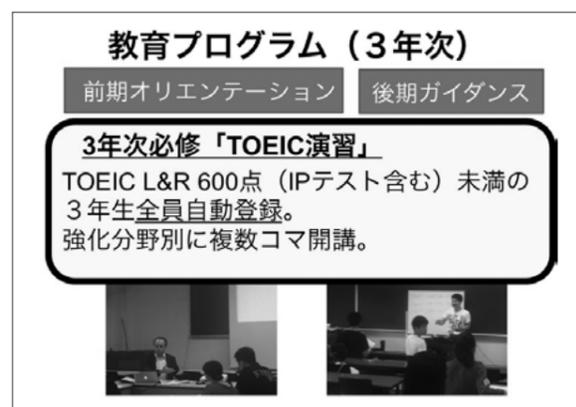
■ 全学生がTOEIC® L&Rで600点を取れるようバックアップ

3年次必修の「TOEIC演習」は、教育プログラムとしては出口に位置しています。3年生4月の時点でTOEIC L&R 600点に達していない学生全員が履修登録される授業としており、前期、後期の初めに該当する学生を集めて、これからのクラスの流れを説明します。この学生たちには、ほかの学年に比べて非常に多くの時間、TOEIC L&Rの学習ができる機会を与えています。

例えば、ほかの授業があってもTOEIC L&Rへの学習を組み込めるように、強化分野別に複数のコマを同じ内容の授業で開講しています。また、3年生は進級要件の最後の年ですので、様々な形で情報共有を行っています。例えば、大学では保護者への成績表の送付を行っていますが、例年6月中旬に送付している前年度の成績表の中に、進級要件達成のためのTOEIC学習に必要な情報を含めた通知を同封する取り組みも行っております。

また、本学では支援教員制度を設けています。これは、学部・学科ごとに複数人の教員が担当となって、

その学生の入学から卒業まで相談窓口となる制度です。その支援教員が、それぞれの学生に詳しいため、学生支援の現状も含めて情報を共有する取り組みを行っています。4年次には各教員による研究指導が組み込まれているということもあり、学生をTOEIC L&Rの学習に向かわせるサポート体制の一環として、教員、大学全体で連携を図るよう努めています。



■ TOEIC® L&Rのスコアを進級要件とした学生たちの本音とは

次に、学生のインタビュー動画をご用意いたしました。登場するのは、一般的な海洋大生たちです。本日、一緒に登壇することも考えていたのですが、海洋大生の多くが夏は陸にいません。島にライフセーバーのアルバイトをしに行ったり、沖縄で土のサンプル採取をしに行ったりしています。そこで、今回は動画で登場してもらおうこととなりました。これらの動画の内容は、事前に質問事項の打ち合わせはしましたが、こちらからこういうことを言ってほしいという願いはせず、学生自身の考えを自分の言葉で述べてくれたものです。

今回、実体験をご紹介します。それぞれの学生たちが、学生生活で起こるイベントなどともバランスを取りつつ、様々な思いで進級要件達成へと取り組んでいる様子をお伝えできればと思います。

● 大学の本気に、追い込みをかけてスコア達成～1期生Aさん～

まず1期生の学生です。この春に卒業し、現在大学院1年生です。進級要件に関しては前例、先輩がいない中で、大学と学生間の駆け引きもあったような、そんな裏事情も語ってくれています。スコア推移としては、上がったりがったりを繰り返しながら、3年生のぎりぎりのタイミングで進級要件を突破しました。

● Aさん

2014年に入学し、2018年に海洋科学部海洋生物資源学科を卒業しました。現在は、大学院で養殖の魚の餌についての研究を行っています。植物原料を餌にして魚を育てることによって、養殖業界の問題の解決のヒントにつながれば良いなと思っております。

もともと水族館とかで魚を見るのが好きで、海や魚に関する研究が面白そうだと思い、本学を志望しました。英語はどちらかというと苦手で、受験でもあまり勉強しませんでした。

進級要件に関しては、1年生の「TOEIC入門」で少し勉強してから単位が取れたあと、あまり危機感なくそのまま3年生になってしまいました。進級要件を意識し始めてからも、泊まりがけの実習や実験の授業があり、TOEIC L&Rの勉強には時間をかけることがなかなかできず、その結果、点数も伸びませんでした。

3年生の夏までは、適当に授業に出て試験を受ければいつか進級要件スコアも超えられると考えていました。焦り始めたのは秋ごろからで、授業の復習をしたり、通学中にTOEIC L&R対策のリスニングCDを聞いたりして、12月に600点を超えることができました。

本気で勉強したのは3カ月くらいでしたが、その前に授業にきちんと出て大事なことは頭に入っていたので、なんとか間に合ったのだと思います。大学院の授業は全て英語なので、ついていくためにはTOEIC L&Rスコア600点以上レベルの英語

力は必要だと思います。また、研究で英語の論文を読むことがあるのですが、そのときにTOEIC L&Rの勉強で身に付けた、長い文章の中から必要なことを読み取る力が役に立っていると思います。

今は養殖について研究しているので、英語力を生かし、場所を選ばず社会に貢献していけたらいいなと思っています。

● 実習中も自学を怠らず大幅にスコアアップ～2期生Bさん～

続きまして、2期生、現在4年生の学生です。入学時のスコアは310点でしたが、3年生の11月には730点と大幅なスコアアップを実現した学生です。

この学生は、何もしないと英語力が下がる見本例のようなスコア推移でした。1年生前期で一度スコアを上げたのですが、その後1年半テストを受けず、英語力が落ちたことを認識しないまま過ごしたので、3年生の4月には、スコアは入学時と同じ程度に戻ってしまいました。そこから要件を満たすまで頑張り、無事に進級しました。この学生は3年生の夏に1カ月航海の実習に出ております。実習中もかなり自分で意識して頑張ってくれた学生です。

● Bさん

2015年度入学、海洋科学部海洋環境学科4年生です。研究室では東京湾のラン藻に関する研究を行う予定です。

本学に入学した理由は、高校生の頃、進路指導の教員に勧めてもらったことがきっかけでした。もともと海が好きだったこともあるのですが、様々なフィールドワークで研究できる点に魅力を感じました。潜水部というスキューバダイビングの部活動に所属し、毎月行われる合宿や昼休みなどのプール練習などで精力的に活動していました。遠泳実習をはじめとする、東京海洋大学ならではの实習にも参加していました。

英語に関しては、高校生の時の成績はとても悪く、どちらかといえば嫌いでしたが、入学後の

「TOEIC入門」の授業で基礎力を身に付けることができました。入学時のスコアでクラス分けがされていたので、英語が苦手な私でもなんとかついてくることができたからだと思います。

進級要件への焦りが出てきたのは2年生の終わり頃です。特に集中的に勉強を始めたのが、3年生の10月でした。演習授業や模試練習会などに積極的に参加したり、隙間時間に携帯電話でのe-Learningなどを活用したりしました。1カ月の航海実習ではあまり英語の勉強に時間が取れませんでした。10月に潜水部を引退したあとはグローバルコモン(語学学習専用スペース)に通い勉強しました。

進級要件を満たしたことで、少しは英語と仲良くなることができた気がします。スコアアップしたことによって、自分は目標に対して努力して結果を出せるということの証明にもなり、就職活動でも英語力が自分の強みの一つとしてアピールできました。将来は食品関係の仕事に携わりたいと考えていますが、国内だけではなく海外にも目を向けなければならないと思うので、今後も英語の勉強を継続してどのようなフィールドでも活躍できる人材になりたいと考えています。

●英語に対する意識そのものにも変化 ～3期生Cさん～

最後に、3期生である現在3年生の学生です。3期生から出願時に外部英語資格試験の結果を提出することを要件にし、入学前から英語への学習を意識させるような改革も行いました。

入学当初、この学生は大学1年生の全国平均よりやや上程度である400点台後半でしたが、進級要件を早々に突破して、続く年次で英語を使って様々なことにチャレンジをしています。英語に対する意識が少し変わってきているということが感じられるかと思います。

●Cさん

2016年度入学、海洋科学部海洋政策文化学

科3年生です。大学では、海産哺乳類、鯨類、クジラ類の資源管理と生活、そしてそれに基づく捕獲枠の設定を勉強しています。

もともと九州出身で、自然に囲まれていた中で生活していたこともあり、釣りが趣味でした。小さい頃から海に憧れがあったので、中学生の時に東京海洋大学の存在を知った時から自分の興味を高められるのはここしかないと思い、本学への入学を決意しました。

高校での英語の成績は普通でした。文法はあまり得意ではなかったのですが、英語を使って話すことに関心はあったので、そういう意味では英語は自分の中では好きな教科の一つでした。それでも、大学入学後はまずTOEIC L&Rの壁にぶち当たりました。これまでの英語の勉強とTOEIC L&Rの勉強法とは異なるので、文法からやり直し、英単語も一からやり直しました。また、大学のTOEIC L&Rの授業は点数別にクラス分けされているので、友達と競い合いながら点数を高められるというのもモチベーションを向上できた一つの要因だったと思います。

TOEIC L&Rの授業と同時並行で大学の海外探検隊(短期海外派遣型演習授業)を活用して、香港に1カ月滞在し、日常的に英語を使いました。香港で培ったリスニング能力やスピーキング能力は自分の英語能力の底上げにつながったと思います。他にも、大学入学時から英語学習のカウンセリングを続けていました。また、海外探検隊の2度目の派遣として台湾に1カ月、そしてJICA連携ボランティアとしてコロンビアでの1カ月滞りも経験しました。これらの海外経験はこれまで勉強してきた英語を発揮する場でもあって、自分の英語レベルの確認にもなりましたし、モチベーションの向上にも役立ったと思います。

進級要件スコアを超えてから、ある程度英語への自信が付きました。大学で受けるTOEIC® TestsはTOEIC L&RでListeningとReadingのみですが、日々の英語学習はSpeakingと

Writingにも少なからず関係していると思うので、TOEIC L&Rを自分の英語能力の確認にも用いています。また、進級要件スコアを超えたことで、次は長期留学の要となるIELTSの勉強をしています。将来は日本の水産業に役立てるような仕事に就きたいと思います。

■TOEIC® L&Rのスコアを進級要件にすることは必要か

進級要件に対する保護者の反応は、ポジティブなもの、不安、心配という声の両方があります。留年への不安から、説明会の質疑応答では厳しいご意見をいただくことが多いのが実情です。ただ、事後アンケートでは、「専門的なことを学び、発表するためには、最低限の語学力が必要だと思うため賛成する」などと記入して下さる保護者もいらっしゃいます。

本学といたしましては、卒業生全員が英語の基礎力を身に付けている、その客観的指標として、やはりTOEIC L&R 600点を超えるスコアを重視しています。

ここで、先ほどの学生たちに、『東京海洋大海洋科学部、現在の海洋生命科学部、海洋資源環境学部にTOEIC進級要件は必要か』という質問を投げかけてみました。イエスカノーか、そしてその理由も話してもらいました。

●Aさん

私はイエスです。卒業生みんながTOEIC L&R 600点以上を取得していることは、大学にとって大きな魅力の一つになると思います。進級要件がなかったら、こんなに英語の勉強をしなかったのではないかなと思います。要件をクリアすることを目標にして、みんなで勉強しようという空気になるのは、自分のモチベーションにもつながると思いますし、結果としてその時の勉強が今役立っていると思います。でも、3年生で進級要件をクリアしていなかった時は、正直こんな進級要件いらなと思う

ていました。

●Bさん

どちらとも言えないです。受験料は安くはないですし、TOEIC L&Rスコアだけが原因で進級できないというのはすごくもったいないことだと思うので、必要かどうかは即答できません。でも、私自身は進級要件があっただけで良かったと考えています。この要件がなかったら、私はここまで努力することができなかったと思いますし、今でもきっと英語のことはすごく苦手なまま、嫌いなままだったと思います。

●Cさん

私自身としてはイエスです。英語の勉強をする機会が増えることによって、留学を経験する人が増えたり、将来グローバルに活躍する学生が増える可能性が高まると思います。しかし、現状では進級要件を超えてしまうと英語を勉強しない学生が多いと思いますので、大学側に600点を超えたあとも積極的に学生をサポートできるような取り組みがあれば良いと思います。

登場してくれた学生たちは、自分自身がある時点でものすごく努力をし、要件を達成しました。一方で、スコアが進級要件に届かず進級できない一部の友人もいます。現実の厳しさも知った上で、在学中のモチベーションを保つ、また将来のプラスになるという点を評価して考えてくれました。彼らがこの要件をうまく活用して自分の道を開くステップにしてくれたことを非常に嬉しく思います。

■進級要件化に対しての様々なご意見

進級要件化後、高い達成率を実現できるようになり、様々なご意見、ご相談をいただくことがあります。いくつかご紹介させていただきます。

まず、小さい大学だからできたのでは、というご意見です。それは確かにあると思います。ただ、全体の規模が大きくても、例えば学部別、レベル別という共通項が多い小さな集団をつかって、そこでの一体感を養うという仕掛けは可能かと思えます。

次に、東京だからできたのではないかとこのころです。この点に関しましては、都市部と地方との比較ということでは優位性が多分にあったと思います。ただ、これまでの5年間と今後の状況は変わっていくと思っております。具体的には、受験機会の確保、そして指導力のある講師が確保できれば道は開けるのではないかと考えます。

そして、お金を掛けたからできたのでは、というご意見もあります。もともと支援事業の中で確立した制度で、特に最初の段階で起爆剤があれば進めやすいというところがありました。ただ、国立大学の限られたリソースの中でやりくりし、教育への投資として必要な分を賄っているというのが現状です。

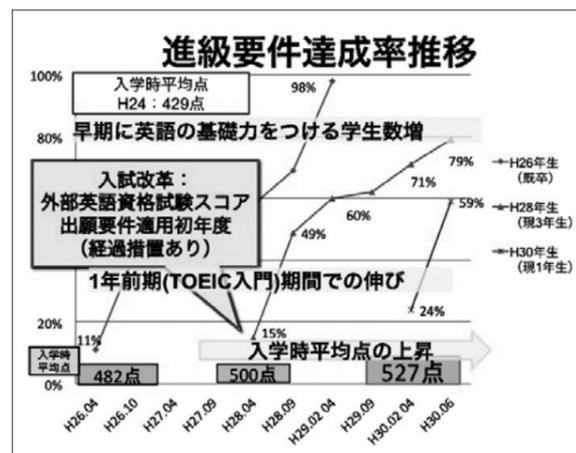
最後に、東京海洋大の学生たちはもともと優秀でしょうというご意見です。これに関しては、その通りです、素晴らしい学生たちばかりです…と言いたいところですが、進級要件となりますと、やはり様々な英語力、事情を抱えた学生もおります。本学でも1期生の結果が出るまでは、10%程度の留年者が出ることも覚悟しながらの取り組みでした。



■ 当たり前で英語ができる理系の人間を育てるために

この制度を通して、学生の力というのは本当に未知数だということを私自身感じるようになりました。今の状況としては、TOEIC進級要件適用の1期生がこの春卒業し、5期生が今年入学して前期を過ぎたところになります。その中で今年の3年生から、入学前の出願の段階で英語を意識させるような改革も行われました。5年分のデータを隔年でまとめると変化がより明確になります。

まず、入学時の平均点が導入前と比べ、100点近くアップしました。入学前から英語を意識し、英語学習を覚悟した上で入ってきている学生の数も増えているのかもしれない。TOEIC L&Rスコアの進級要件化を続ける中で、1年生の前期で進級要件を突破する学生数が大幅に増えています。今年の1年生に関しては、入学3カ月後の6月にデータを取りましたが、すでに進級要件達成率が59%に上っています。こちらの約60%という数字は、1期生は2年、3期生では1年かかって達成している数字です。



私どもは、4年生の100%という数字にこだわって、大学院進学時や、就職する際に当たり前で英語ができる理系の人間を育てる教育支援に取り組んでおります。

進級要件というと、非常に厳しい制度という印象がありますし、実際に数人ではありますが、他の学生よ

りも時間をかけて達成していく学生がいることも事実です。ただ、そこを超えられたときには、英語力以上のものを得てくれているのではないかとこのころです。ご清聴ありがとうございました。



東北学院大学 渡部 友子 氏
愛知県立大学 宮谷 敦美 氏
信州大学 平林 公男 氏
東京海洋大学 鈴木 瑛子 氏

英語が苦手な学生たちの勉強への 動機付けについて

英語に苦手意識を持つ学生に対する英語学習へのアプローチ、動機付けはどのようにされていますか？
良い施策があれば教えてください。

東北学院大学：渡部 氏

英語に苦手意識を持つ学生は、本学ではクラス分けでグレードeに入っている学生と理解してお答えいたします。

彼らは英語につまずいたまま進学してしまい、そもそも英語の勉強の仕方が分かっていないように思えます。英語検定試験を初めて受ける学生も多いです。まずは自分の英語力を認識し、その次になんとかしたいと自ら思ってもらうことが必要です。そのために入学してすぐの英語へのアプローチとしてTOEIC Bridge® Testを受けてもらい、現状を打破したいと本人が思うことが初めの一歩になると思います。

愛知県立大学：宮谷 氏

愛知県立大学では、主に二つの取り組みを行っています。一つ目は、将来いかに英語が必要となってくるかというガイダンスを行っています。例えば、2013年から2015年までの「グローバル人材プログラム」、現行の「グローバル実践プログラム」のガイダンスをする際には、プログラム内容の説明だけでなく、それぞれの専門分野について掘り下げます。例えば、看護学部の学生にとってこういったところがグローバルとつながるのか。情報科学部や、教育福祉学部の学生では、というように、それぞれの専門性に加えて、必要となる英語力や多言語との接点を説明します。また2016年度までは、外国語学部での学科別ガイダンスでは、学習動機や外国語学習ストラテジーに関するディスカッションも行っていました。

もう一つの取り組みとしては、やはりiCoToBaかなと思っています。まずはグローバルに関わることは楽しいという印象をもってもらうことが大事になるかと思っていますので、新学期の初めに開催したウェルカムウィークではパンケーキを振る舞うイベントを実施しました。これが功を奏して200人近くの参加者があり、その時にクラスの開講情報もあわせて紹介し、興味を持ってもらうことができました。また、Facebookなど学生にとって身近な媒体でPRしたり、ときには個別対応も

行ったりしています。それぞれの学生がどこで英語への興味を持つかわからないので、様々な方法を試みています。

信州大学：平林 氏

私は、学生に卒業後何になりたいのか、自分の描く将来像をよく聞くようにしています。今はどういう職業に就こうか、どんな分野の研究者になるのか、大学院に進学しようか、英語はもう避けて通れないですね。卒業後も、必ず英語はツールとして必要になります。学生がそれを分かった上で、私たちは、「英語を不得意な科目としたままで卒業するのも、得意な科目として卒業するのも、あなた次第です。もし、あなたが英語を学びたいという意識があるのであれば、それをサポートする準備はうちの学部ではできていますよ」ということを強く伝えるようにしています。

学生が何をやりたいのか、どういう将来を描いているのかということをよく聞き、一人ひとりに合う形でサポートをしていくことが有効かと思っています。

東京海洋大学：鈴木 氏

一言で言うならば、進級要件かと思っています。仲間同士の意識、ピアプレッシャーを高めていくということが、伸びしろがある学生にとっては非常に有効だと考えております。ゴール設定の際に、入学時のスコアに合わせて微調整を加えていくのか、あるいはゴールを努力目標にするのか、なんらかの規定を加えるのかなど、様々な仕掛けがあると思いますが、個人戦ではなく、早い段階で団体戦にして、グループの中で励まし合ったり、学習状況を報告し合ったりというポジティブな雰囲気を出していくのも一つ有効な手立てだと思っています。

もう一つ、ロールモデルをつくることも良い方法かもしれません。例えば、1年次の授業の中で、本学の研究者が英語でインタビューを受けたり、研究発表をしたりという映像を積極的に見せるようにしています。

英語学習の先にある着地点の目安というのを先に見せると、モチベーションが上がると考えております。

大学英語教育へのTOEIC® Program の導入について

大学の英語教育にTOEIC® Programを導入する際、課題や反対意見はありましたか？ また、それをどのように解決し導入に至ったか教えてください。

東北学院大学：渡部 氏

英語力を測定するテストを何にするのかということでは議論がありました。大学教育なのに、なぜビジネス中心のTOEIC® Programを取り入れるのか、という意見は上がってきました。しかし、ではTOEFLにするかという議論になったところ、TOEFLは学生には難しすぎる、受験機会が少ないなどの問題が浮上り、最終的にはTOEIC Bridge Testとなりました。

テストを導入すること自体には大きな反対はありませんでしたし、どのテストにするかは大学それぞれで決めていけば良いと思います。問題はおそらく費用になるかだと思います。本学は全員の受験料を確保することができましたが、それがなされない場合、学生に出してもらるか、あるいは他の方法とするか、その点は難しいと思います。

愛知県立大学：宮谷 氏

本学は2段階でTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) の導入に取り組みました。最初、外国語学部でグローバル人材育成をスタートした際は、なぜTOEIC® Testsを選ぶのかという話は出ました。ただ、全学部でのグローバル人材育成を考えたとき、研究者だけを養成するのではなく、社

会に出ていくことを考えると、学生の卒業後につながり、就職活動にも使えるという理由でTOEIC Testsの中のTOEIC L&Rが良いのではないかという話になりました。

ただ、TOEIC L&R導入を決めた際には、点数を上げることだけを目指した教育をするのではないことを強調しました。TOEIC L&Rの点数ありきではなく、英語力を付けた上で、プログラムのアセスメントとして取り組むというロジックがあったからこそ、全学化できたと考えています。

とはいえ、全学化するときには、1年生、2年生の全学分の受験料助成を大学負担でできるのかという点は議論になりましたし、3年、4年次での対応を考えたときに、TOEIC L&Rスコア以外も認められるものは設定すべきであることや、本学の英語教育が一定レベルであるという自負があるのであれば、教養教育の成績もスコアと同等に扱うべきではないかという議論はございました。

信州大学：平林 氏

本学は導入時、客観的に評価できる指標であればなんでも良いというスタンスでした。ただ、インターナショナルにもある程度通用し、受験者数が多く、大学レベルの英語で…と考えるとTOEIC L&Rだと思い、採用しています。英語の4技能が測れて、より本学の学生たちに適したものが出来たら、そちらのほうに移っていく可能性はあると思いますが。

それから、先ほども話に出ましたように、英語の点数を上げることが最終目的ではないということは、信州大学の中で大切にしています。学生が目標値をきちんと持って、設定した期間に学習するための一つのツールとして位置づけています。TOEIC L&Rはビジネス寄りの試験ではないのか、という意見もありましたが、これに関しては、繊維学部の学生はほとんどが技術職として就職するため、学生にとっても有利なのだということを説明しました。

東京海洋大学：鈴木 氏

本学の場合、当時の学部長の強力なリーダーシップの下で進んだというところで、目立った反対意見というのはあまりなかったと聞いております。

ただ、不安の声として、海洋に特化した理系大学として専門教育がおろそかにならないかという意見はありました。それに関しては、グローバル化が進む中で専門教育で学んだ内容を英語で説明することが今後一層求められるようになっていくので、専門教育が英語コミュニケーションかという、どちらか一つというものではないことを伝え、理解を得て進めました。

また、他大学でも同じようなご意見がありましたが、TOEIC L&Rはビジネス英語に寄った試験ということで、アカデミックな大学教育にそぐわないのではないかという意見はありました。これに対しては、実学重視の伝統を有する本学として、就職後の産業界で役立つということでTOEIC L&Rを選択したと聞いております。

教育の質保証について

大学では、一般的に2年生で共通教育が終了しますが、教育の質保証の一つとして英語が重要視されている中、3、4年生が継続的に英語学習に取り組む仕組みづくりはされていますか？

東北学院大学：渡部 氏

現在、英語教育センターでは1、2年生を対象に指導していますが、3年生用の選択科目として英語Ⅲを準備しています。TOEIC L&Rに向けた、勉強会形式の夏季集中講座授業です。

我々は、1、2年生以降の英語学習は本人次第と考えますが、1、2年生で英語へのモチベーションを上

げて、もう少し頑張ったらもっと先までいけるよ、という英語学習の目標を見せてあげることは意識しています。もうちょっと頑張りたいという学生は多くはないですが、いるという手応えはあります。実際に、「えいごりらうんじ」で行っているTOEIC L&R自習会も、学生からの追加開催希望の声が聞こえてきています。

また、専門別にどのような英語教育が必要かという点は、各学科で考えてもらい、英語教育センターで支援できる場所があればフォローしたいと思います。

愛知県立大学：宮谷 氏

本学もまだまだ発展途上にあると思っています。本学は中期目標を立てて次のプランを検討しており、現在、2019年度以降の目標を立てているところです。ここでも英語教育は課題になっていますので、今後新しい方針も出てくると思いますが、現状を申し上げます。

まず、教養教育の中で1、2年次に必修外国語科目を設けています。3年次以降には4年ほど前から英語の4技能別のクラスを設け、それぞれ本学の英語の外国人専任教員が担当しています。その他にも、1、2年生にe-Learningシステムを提供し、希望すれば3年次以降も続けて学習できるようにしています。

それからiCoToBaで英語科目を1週間に90分10コマ行っておりますので、目的意識を持った学生が学習を継続できる環境は確保しているという状況です。

信州大学：平林 氏

本学は先ほど話をしましたように、大学院試験にTOEIC L&Rを導入し始めました。それによって、大学1、2年次で強制的に2回受けることになるのですが、それは全て学生が受験料を払っています。大学としては一切補助をしていません。費用を大学が全額補助すると、テストに本腰を入れない学生が出てくるので、現在はそのようになっています。大学1、2年次に強制的に受けた分、続く3、4年次である程度継続してTOEIC L&Rを受けていなければ、大学院試験のとき

に不利になります。70%近い学生が大学院に進学しますので、そこが一つ、学生にとってのモチベーションになっていると思います。

また、1、2年次に英語学習を通じて、自習の習慣づけを行いたいと思っています。英語においては、週1、2回の英語の授業だけで英語力が付くはずがありませんので、いかに自分で勉強する習慣を身に付けるのが重要で、それが目標です。1、2年次にうまく習慣づけできると、3、4年次に進級しても習慣で勉強するような学生が出てきます。全員がそうとはいきませんが、少しでも増えてくれれば良いなと思っています。

東京海洋大学：鈴木 氏

本学ではTOEIC L&R 600点を突破した後に、実際に海外に出て経験を積むことを推奨しており、そのためのプログラムを別途設けています。ただ、時間的制約、そして経済面で一部の学生が参加するプログラムになってしまっており、全員に対しての仕組みづくりという点では、今後議論が必要だと考えています。

一部の学部・学科で2年生後期から、英語ネイティブの研究者が英語で専門科目の必修授業を行う取り組みをこの秋からスタートします。「General Engineering (工学概論)」、「General Oceanography (海洋学概論)」の二つの授業です。このクラスで、これまでに培った英語力を使う機会、そして学生生活の早い段階で英語学習を意識させるサイクルを生み出していければ良いと思います。

学生たちのスコア伸び率について

伸びる生徒と伸びない生徒の違い、その特徴はなんだと思いますか

東北学院大学：渡部 氏

学力の伸びについては、最終的には本人がどれだけ学習しようと思うかだと考えます。TOEIC L&Rスコアが低い学生を見ていると、勉強したことがないからできないと思っているところがある気がします。Eクラスになって初めて、自分の英語力への危機感を感じる。次になんとかしなきゃと思えると、実際に勉強するにはどうすれば良いのだろう、という心境の変化があります。さらに少し勉強してみると成果が出て、その実感が持てるようになると、自分で頑張れるようになると思います。

逆に、言われた通りの勉強をして、なんとなく成績が良い学生というのは、自分の学力への気付き、やればできるという発見がないまま終わってしまい、英語力が伸びないこともあります。

最初のスコアが低いから駄目、高いから大丈夫ということではなく、最終的に自分でどれだけ勉強したいと思うかという点につながっていくのかなと思います。教員としては、いかにそこに火を付けられるかということが重要だと考えます。

愛知県立大学：宮谷 氏

三つほどポイントがあるように思います。一つは、目的意識がある学生。もともとのスコアが低い・高いというよりは、なんのために今TOEIC L&Rの勉強をしているのか。そして、目標スコアを達成したあとに自分が英語を生かして何をやりたいのか、という目的意識です。そして目的意識を持つためのモチベーションの一つとして、学生にとってイメージしやすいのは、本学

でいえば留学かだと思いますので、協定大学を増やし、資金的にも低いハードルで行けるところを増やしました。そして、留学のチャンスをつかむためには良い点数を取ったほうが良いよね、と学生たちのモチベーションを高め、目的意識につなげています。

二つ目は折れない心。本学の学生は、非常にまじめな学生だと地元でも定評がありますが、言い方を変えると失敗をあまりしたことがないとも言えます。大学に入ると失敗する機会はたくさんあるのですが、そのときに失敗したからもう駄目だと思うのではなく、今回は駄目だったけれど次がある、というように、次に向かう強さを持つことが大切だと考えます。大学ができるサポートとしては、教員やiCoToBaのサポーターが声掛けをするなど、仲間やコミュニティをつくるのが手助けになるかと思っています。

三つ目が面白い心です。例えば、本学ですと、英語でボランティアをやってみようとか、観光のPR記事を作ってみよう、という学生が面白いと思える仕掛けをいくつか持っています。それからiCoToBaでは、自分たちで企画を立て、やってみたいことにも取り組める環境をつくっています。先日はある学生が、韓国料理イベントの開催に挑戦しました。楽しく取り組める環境づくりと、その環境を先輩・後輩で次の世代へつなげることができているというのが、面白い学生を増やすポイントになっているかと思っています。

信州大学：平林 氏

一番はやはり学生にモチベーションがあるということ、目標をきちんともっているということがとても重要と考えています。目標があるということは、夢がきちんとあるということです。将来自分がこんなふうになりたいというビジョンをもっている学生は、よく伸びます。

それからもう一つは、先ほども申しましたが、学習の習慣づけがきちんとできているかどうかポイントになるかと思っています。ある程度習慣づけができてくると、もともとポテンシャルの高い学生たちですので、自分で

勉強するようになります。早い段階で習慣を付けさせてあげるとというのが我々の使命であり、重要なことかと思っています。

東京海洋大学：鈴木氏

本学は、全員に基礎力を付けるという、進級要件を通じて大学の覚悟を決めていますので、学生たちにある差は、伸びる・伸びないではなく、本気になれるかどうかの差ではないかと思っています。例えば進級要件に関しては、期限までに間に合うかどうかという一点に掛かっていて、いつ本気になれるかということだと思います。

大学としては、早く学生が本気になれるような仕掛けづくり、そして本気になったときに適切な教育を行っていけるような支援というのは心掛けていますが、一言で言えば伸びない学生はいないと信じています。

TOEIC® L&Rと英語力の関係について

TOEIC® L&Rスコアアップと実際の英語力の関係についてどう思われますか？

東北学院大学：渡部 氏

英語力があっても、それがTOEIC L&Rのスコアには表れないこともあると、自身の学習者としての経験を振り返って感じます。テストのスコアは、指標・確認という意味では重要ですが、その人の力のほんの一部でしかないという認識があります。英語教員としてはスコアだけを見るようにはなりたくないという思いがありますが、学生にしたらテストの点が全てじゃないと言われると、逆にモチベーションを下げてしまう可能性もあるので難しいところです。TOEIC L&Rで目標に届かなかっ

た学生にどのように心を折れさせずに、次は頑張ろうと思ってもらえるかということに頭を悩ませています。

愛知県立大学：宮谷 氏

渡部先生がおっしゃるとおり、英語ができる学生はテストも良い点を取りますが、テストで良い点を取るイコール英語でのコミュニケーション能力があるとは言えないというのが、私が見ている範囲での結論です。

ただ、東京海洋大学の取り組みもそうだと思うのですが、英語に対してそこまで積極的ではない学生に対して、TOEIC Testsの目標スコアを設定し、学生に頑張ってみようと思ってもらう外部的な動機付けは重要かと思っています。あまりやる気のない学生、まだ目的をもてない学生にとっては、外部的動機付けはとても意味があることで、まずは少なくともスタート時の英語能力よりは高くなれるという効果はあると思います。

ただ、外部的動機だけで、点数を取ることばかりに注力している学生に英語力が付いているかということ、やはりそうではありません。英語のスコアが良いだけでなく、コミュニケーション能力が高い学生は、様々な取り組みにも積極的に挑戦しています。最初は外部的動機からスタートしたとしても、それをどうやって生きたコミュニケーション力に結び付けるかというのが教育機関としての一つの目標と考え、私たちはそこを狙って教育を続けていきたいと思っています。

信州大学：平林 氏

「英語力」の定義にもよりますが、私自身はTOEIC L&Rのテスト結果と学生の英語力というのは関係なく、TOEIC L&Rのスコアは英語に関する学生自身の一つの指標だと考えています。TOEIC L&Rで測るのは、英語で聞く力と読む力だけなので、実際にコミュニケーションできる英語力とは少し異なるかと思っています。我々の重視している英語力は、英語を使ったコミュニケーション、例えば、聴衆に理解してもらえるプレゼンができるかとか、論文がきちんと書けるかということなんです。

が、スコアが高い学生が必ずしも論文を書けるかというと、書けない学生も多いので、このようにお話をさせていただいています。

ただ、学習者としてはスタンダードな指標がないと英語力を自分で測ることができませんので、その一つのツールとしてTOEIC L&Rを使っています。ご理解いただけたかと思います。

東京海洋大学：鈴木氏

例えばTOEIC L&Rが595点の学生と600点の学生で英語力の差がそれほどあるのかということは、進級要件を設ける上でも、慎重にならなければならないところだと考えております。

そこでもちろん1回テストを受けただけで自分の実力が出ると思わないでほしいということは学生に重々言い聞かせ、どの時点で自分が進級要件を達成していくのか、前倒しで考えるよう指導もしています。そのおかげで、学生には計画力も付くようです。

スコアイコール英語力ではないとは考えますが、指標として、こだわりをもっていくのもありなのかなと考えています。

Q&A セッション

第2部

それぞれの大学におけるTOEIC® L&Rへの取り組み

東北学院大学へのご質問

TOEIC Bridge® Testのスコアによるクラス分けは、学生のレベルに合った授業運営につながりましたか？

まだ試行錯誤を重ねていますが、授業運営については、スコアでクラス分けをするようになったため、教員が学生の英語力を以前よりも把握しやすくなりました。特定のレベルの学生に対し、どのような内容の授業を行うのが良いかというところは、各教員の経験知に頼るところが多いという状況です。

英語教育センターとしては、レベルに合わせた教科書の提案はするようにしていますが、実際に使ってみてフィードバックをいただかないと適切かどうか分からないので、今後の課題としては、教員とセンターとで情報交換をしながら、うまく調整できるようになっていければと思います。

愛知県立大学へのご質問

グローバル実践教育プログラムを全学に展開する際の反対意見や課題を改めて細かく教えてください。また、その課題をどのように解決しましたか？

全体のプロセスとしては、助成が終わる1年半ほど前の2015年から、TOEIC L&R受験の全学化をどういう流れで進めるか、実際の運営をしていたコアメンバーで作戦会議を始めました。正直言いまして、これまで外国語学部で「グローバル人材プログラム」に取り組んでいると言っても、外国語学部の教員80人全員が正確に現状を認識しているかといったら、そうではありませんでした。

外国語学部では、例えばTOEIC L&R受験後の情報などの共有は日頃からしていましたが、2015年度の冬に、今まで外国語学部が実施してきた成果を全学に紹介し、これを今後全学に進めていくビジョン提案を何回か報告会という形で行いました。

大学というところは、検定などの数値で教育効果を測るということに対しての感覚や受け入れが消極的です。2016年度には、全学生がこの点数を取らなくてはいけないという考え方ではなく、それぞれの専門を生かしたグローバル人材育成には、どのようなプログラムが必要で、かつ学生のモチベーションも上がるような目標設定をどうするべきかという議論を全学の教員と何回も膝を詰めて話し合いました。これが深い理解につながったかと思っています。

また、会議だけで報告、相談をするのではなく、学

内での広報活動も大切になってくると思います。2016年度から外国語学部が主に使っていたiCoToBaを全学に開放した際には、学生だけでなく、教員も訪れやすい雰囲気、楽しい場所ですよという周知を心掛けました。それから2017年度から各学部の専門の先生に、それぞれの専門分野と外国とのつながりという観点を話してもらい、グローバルセミナーを開始しました。ランチタイムに日本語や英語で講演会を行うために、他学部の先生たちに協力を依頼するスタンスでスタートし、全学で盛り上げていこうという雰囲気づくりについては、ある程度成功したと感じています。

今後も様々なことが起きると思っておりますが、工夫していきたいと思っております。

信州大学へのご質問

TOEIC® Program導入に際して理系の先生が中心となって進められたそうですが、英語教員サポート体制については、どのようなものがありましたか？

発表の中でも申しましたが、本学のグローバル教育はトップダウンで進めてきているもので、博士課程の学生がきちんと英語でプレゼンできるとか、あるいは英語で論文を書くことができるというようなことが、とても重要なことだという視点から発展しています。そのため、1年次でお世話になる共通教育の先生方が担当してくださっている英語がとても重要で、ぜひ、大学での導入の英語についてご指導をお願いしたいと申し上げて、多大なご協力をいただいています。

信州大学の共通教育の語学担当の先生方は大変協力的です。例えば繊維学部で最初にTOEIC L&Rのスコアを成績に取り入れ始めることが決まった際には、学部の方針を1、2年次の英語を担当していただく共通教育の先生方にお伝えし、TOEIC L&Rのスコアを成績に反映していただくようお願いし、実現いたしました。その後、他の理系の学部へ展開した際も、同じように協力していただきました。

導入に関しては、学部である程度、リーダーシップを取らないといけないと考えています。1、2年生の教育を共通教育の先生に任せきりというのは一番良くない気がします。クラス方針などが曖昧なお願いの仕方になると、先生方はどのように進めれば良いのか分からなくなるのは当然なので、依頼するときには明確、具体的に、どのような英語力を主に付けていただきたいかをお願いをして、協力いただく体制をつくっています。それほど問題なく導入が進められたのは、これまでに、密にコミュニケーションをとらせていただいていたおかげかと考えています。

東京海洋大学へのご質問

TOEIC® L&R 600点を進級要件に設定されていますが、600点を達成した学生は英語力がしっかりと身に付いたと実感されていますか？

英語力というよりは、英語の基礎力が身に付いているように思います。海洋大生は、理系ということで、自分の好きな分野などをもっている学生は多いですが、英語に対しては苦手意識をもったまま卒業してしまう傾向があります。それをなんらかの強制力をもって勉強に向かわせることで、将来の機会ロスを避ける機能があるのではないかと思います。特に、低いスコア帯からスタートしている学生は、英語の基礎力だけでなく、計画力や自信も付き、目標点を超えた後に英語学習を継続する場合も、自分でどのように進めれば良いか分かる力もついたように感じています。

反対に英語力そのものという点では、昨今TOEIC L&R 600点というだけではなかなか厳しくなっていると思います。ではそれが730点なのか、他の資格試験の高得点なのか、実際に外国で起業できる力のかなど、いろいろな考えがあると思いますが、まずは対象学部所属の全学生に課す進級要件としては、英語の基礎力を身に付けるということで、このTOEIC L&Rスコアで十分に有効であると考えています。

発行月：2018年11月

発行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521- 5012 FAX (03) 3581-5512

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<https://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC, TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A, and in Japan under license.

本書の無断転載・複製を禁ず